

回想：私のインド農村調査25年

藤原健藏*

目次

- | | |
|-------------------------------|----------------------------------|
| 1. インド調査に頭を突っ込むようになった経緯 | 10. 海外地域研究には、「継続すること」が大切 |
| 2. 初めてインドの素顔に接したパンジャープの村落調査 | 11. 北インドと南インドをつないで：第Ⅲ期プロジェクトはじまる |
| 3. 「火中の栗を拾って」インド研究へ | 12. 「今世紀最大の干ばつ」のなかで |
| 4. 何を、どのように調査するか：仮説の検証か、発見か | 13. プラーミンの村アパネリの様変わり |
| 5. インド調査の最初にして最大の難関は、調査ビザの取得 | 14. 世情騒乱のなか、半島中部の村々で分散調査をする |
| 6. 先進地から後進地へ：南インド・プロジェクトの調査地域 | 15. デカン高原中部のマラタの村で、村民の結束と弛緩を知る |
| 7. 調査対象とは「付かず離れず」の関係 | 16. ヴィンディア山中、パンジャラの村は意外に開放的 |
| 8. “よくぞ、殺さずに済んだ”インド僻地の調査 | 17. マルワ高原のガデル村で、トライブの貧困脱却を考える |
| 9. 地理学再生のため、フィールド調査に取り組む | 18. 調査の終わりに |

1. インド調査に頭を突っ込むようになった経緯

私は1978年から1990年までの間、石田 寛先生のパンジャープ調査の後を引き継ぐ形で、広島大学のインド調査の代表をつとめました。その詳細については、総合地誌研究資料センター（以下、総合地誌研と記す）の研究叢書17号『海外地域研究の理論と技法—インド農村の地理学的研究—』と、地誌研年報2号『インド干ばつ常習地域の村落変化』と同7号の『広島大学のインド調査—何を、どのように行ってきたか—』にまとめています。ここでは、それらを中心としながら、その裏話や、特に強調したいことについて話したいと思います。

私が広島大学のインド調査に関係するようになった経緯については、『広島大学のインド調査』の69ページ、「V. 地理学者はどのようにフィールドに関わるか—地域研究と地誌研究」の冒頭に書いてあります。「筆者はもともと自然地理畑の者であり、インド調査にはパンジャープ調査の際に補充要員として急遽加わった」とあります。石田先生は前

* 広島大学名誉教授；Professor emeritus of Hiroshima University

に、“米倉先生のインド研究を中継ぎでやった”とおっしゃっておられましたが、“それは一寸おかしい。中継ぎは私の方のはずであったが…”と思っています。

というのは、2002年に亡くなられた村上 誠先生がパンジャブ調査（1972年、研究代表者石田 寛）の直前に、文学部から当時私が所属していた教養部に移ることになりましたが、全学の一般教育を預かる教養部では赴任後の一年間は海外出張まかりならんという内規がありました。石田先生は“村上さんの穴をどうしよう。”と隊員補充に困り果て、二人であれこれ思案したが急場のことでうまくいかない。“藤原さん、あなた出られんかの…?”ということになったものの、私も教養部後期の講義をたくさんもっているし、大学紛争後の教養部改組で揺れていたこともあり、とても無理でした。しかし、あれこれやっているうちに教養部の先生方の理解もあり、後期の講義をどう端折ったのか、帰国後に補講することにしたのかも忘れてしまいました。石田先生の本隊から1か月遅れて、インドに馳せ参じることになりました。

慌しい日本出発であったためか、ルフトハンザの夜の機内でザックか何かの繕いをしていたところ、日本人のスチュワーデスが見かねて、親切に手伝ってくれたのを不思議にも今でも覚えています。異様な匂いが充満するデリー空港に深夜に降り立ち、パスポート・チェックで危うくボールペンを失敬されかけながら外に出て、さてホテルにどう行こうかと思案していると、行く手を遮る客引きの人垣のなかに、なんとインド人のように日焼けした吉田栄夫先生と応地利明さん（当時名古屋工大）が手を振っているではないか。日本から送った自動車や観測機材の受け取りが大幅に遅れ、炎熱のニューデリーに足止めを食らっていたとのこと。口には出さなかったが、心底、“助かった”と思いました。

2. 初めてインドの素顔に接したパンジャブの村落調査

パンジャブ調査隊には、自然地理関係として文学部の吉田栄夫先生と助手の成瀬敏郎さんがいたので、補充隊員の私に与えられた研究テーマは特にありませんでした。誰もやっていないテーマを現地で見つけてやって欲しいということでした。新聞社の遊軍のようなもので自由だが、それだけに現地調査の実力が試されるものでした。南極観測で測量技術を自力でマスターし、講義でも地図学を担当していた関係もあって、調査村落に入ると直ちに大縮尺の集落地図を作り、人文グループの戸別調査の便に供することを自分の仕事として買って出ました。私にとってのインド最初の実測図は、ヒマチャルプラデシュ州のカングラ盆地でつくった「ローナ村の地形と土地利用」（『海外地域研究の理論と技法』p.26）です。標高6,000メートル級の連山がそびえるダウラダール山脈の山麓に広がる開

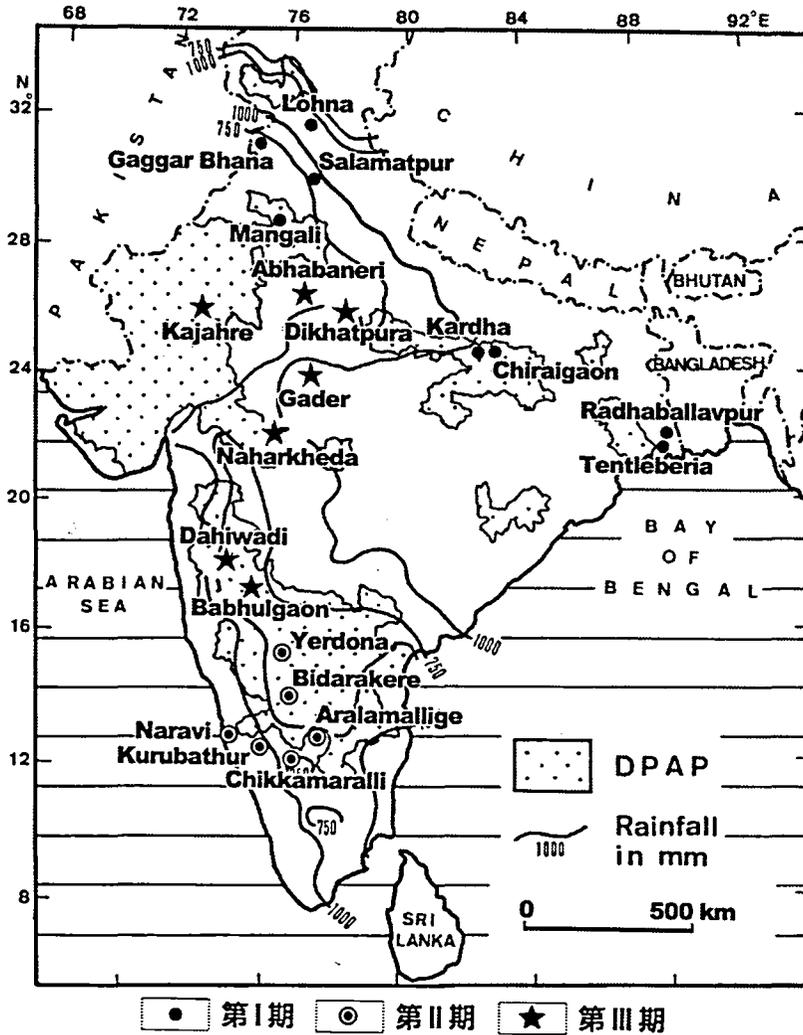


図1 広島大学インド調査第Ⅰ～Ⅲ期の対象集落

析台地上の村落だったので、起伏表現には苦労しました。余談ですが、その図の凡例部分にインド陸軍の兵舎があったが、そうとは気付かずにカメラとトランシットを持って近寄り、銃を突きつけられて肝を冷やしたのを昨日のように思い出します。当時は、1964年の中印国境紛争でインド軍が完敗し、ヒマラヤ山中への外国人立ち入りにすごく神経を尖らせていた頃であり、よくぞ兵舎にしょっぴかれずに済んだと思います。

またある時、全戸世帯の悉皆調査票を整理していて、50歳代以上の次・三男で配偶者がいないのに子供をもっている例が多いのに気付き、怪訝に思っ、その理由を調査助手兼通訳の役で調査隊に参加していたインド人大学院生に訊ねたことがあります。彼は答えに

くそうにしながらも、“実は私も結婚していないが、郷里に子供がいます”と言って、土地の少ない山間地域では、長男以外はまともに結婚し家庭を作ることが難しいことを説明してくれました。事情を知らなかったとは言え、他人の琴線に触れるようなことを訊ねてしまったと、悔やんだことが忘れられません。

予備知識もなしに現地へ飛び込んだことによる失敗もありましたが、桃源郷のようなングラ盆地の村での約2週間の調査は楽しいものでした。その忙しい調査を終えると、私達はバンジャブ平原に降りてゆき、典型的な用水路灌漑農村であるバンジャブ州のシーク教徒の村ガッガルバーナと、用水路灌漑フロンティアに位置するハリアーナ州の大規模・多ジャーティ村落マンガリという、自然環境も社会構成もかなり違う二つの村で、石田隊の主要な研究テーマである「農業・集落立地における自然環境の意義」、「小農民村落における社会構成と土地利用」について調査をしました。ガッガルバーナ村では約1ヵ月の滞在であり、またミサラキアット（村検地帳）やインド国勢調査局の集落調査報告書などの古い資料が残っていたこともあり、予定していた調査をほぼこなすことができました。しかし、マンガリ村では人口が1万近くもあり、かつジャーティ構成が複雑であったため、2週間の滞在では全体像を捉えることすら困難な状況でした。例えば、マンガリ村の農村工業分布図（『海外地域研究の理論と技法』p.36）、これは私の実測・作成した集落地図をベースに中山修一さんが村内の家内工業をプロットしたのですが、このベースマップをつくるのに5日余りを費やしました。何しろ、道路がごらんのように迷路のように入り組んでいる上に、見物の子供をポール持ちの石田先生が“チャロチャロ（どけどけ）”と言って払い退かせたり、牛の通り過ぎるのを待ちながらでしたので…。しかし、出来上がったベースマップに、ジャーティ別の井戸、寺院などの公共施設、4つの行政村の境界などを入れてみたところ、それまで「巨象の一毛をなでる」ように朦朧としていたマンガリ村の素顔がはっきりとしてきました。この村は、1857年のセポイの乱に多くの反英戦士を出したところでありますが、そうした自治色の強いインドの伝統的村落の実像を、この地図をベースに明らかにすることができたなと思います。

石田先生は得意の英語を駆使して現地の大学や行政機関との交渉に当たられ、大変な苦勞をされていました。われわれ隊員もお偉方への挨拶回りやらパーティ出席に付き合わされ、「調査の時間が惜しい」とぶつぶつ言っはいましたが、調査を順調に進めるためには致し方ないとも思っていました。広島から来たと言え、小学生でも「ヒロシマ・ナガサキ」と口にするお国柄、たまたま地区軍司令官が同席したパーティで日本の防衛問題が話題になりました。石田先生が被爆から戦争放棄などをとうとうとやっていたが、自衛隊はしよせん軍隊ではないかと突っ込まれると、私に“これ、どう答えたらいいかね”

と私に振り向ける始末…。私もうなりながら、“第2次世界大戦前の軍部独走の苦い経験から、現在では徹底的なシビリアンコントロールをしている”と答えたら、納得したようには思えなかったが、その話題は一応終わりました。先方も客人をもてなす礼儀を弁えていたようです。

インドの行政機関との交渉はまことに大変で、いわゆる「インド式事務処理」の複雑さ、遅さと役人の尊大さには散々てこずらされました。ある時、日本からの小包の受け取りに石田先生と一緒に郵便局に行ったことがあります。窓口の向こうにそれらしき小包があるのに、局員は“担当者が今日は休んでいる”“ほかの用事で忙しい”とかと言って、いっこうに対応してくれない。3日目には“昼飯に出ている。お前たちも食べて来い”と言うのを遮って“受け取るまで食わん”と意地を張り、二人で40度近くの暑さのなか3時間ほど粘ったことがあります。袖の下が欲しかったようですが、それでは“癖になる”“この国をだめにする”と言って二人で頑張りました。インドでは怒り心頭にくることは度々でしたが、“この国で生きるには「あせらず、怒らず、諦めず」がモットーですよ”という在留邦人のアドバイスをわが身に言い聞かせ、我慢することが度々でした。いずれにしても、パンジャブ調査では調査地域が三つの州にわたっていたため、州ごとに調査許可の取得等に多大の時間とエネルギーを費やし、その分、村落での調査日数を削る結果となり、後日のインド調査に一つの反省材料を残すことになりました。

広島大学のインド調査では、標本村落における集中調査を終えると、隊員は各自の研究テーマを携えて各地に転戦することになっています。私たち自然地理グループはパンジャブ平原の微地形と河道の変遷、1895年以降の灌漑の進展と地下水の変化の関係などについて、かなり突っ込んだ調査をすることができました。地下水変化については後でお話するとして、微地形の地図作成についてはもう時効ですから、その裏話を白状することにしましょう。インドにはイギリス植民地時代からの英語文献や地形図があるので、他の発展途上国の場合とは違って比較的容易に現地調査に取り掛かれるという利点がありました。例えば、1960年代には植民地時代に作成した地図を5万分の1に編集しなおしたインド測量局の大縮尺があり、国境地帯や海岸地域を除けば、われわれ外国人も見ることができました。しかし持ち出しは禁止です。共同研究のパンジャブ大学にも5万分の1地形図が揃っており、そこには河畔砂丘がきれいに表現されていたが、残念ながら日本には持ち帰れない。地図を管理していたムカジー助教授は“風邪のために欠勤するが、研究室で自由に見てもいい”と言って自室の鍵を貸してくれたので、これ幸いと成瀬君、ヴァナラス・ヒンドゥー大学に留学中の林正久君の3人で、2・3日を昼夜ぶっ通して、50数葉の地形図から河畔砂丘など主要な微地形をトレーシングペーパーに抜き書きしました。その成果

は後に私の地下水位変化の論文や、成瀬君の学位論文などに重要な基礎資料として利用しました。あの時、ムカジー先生は気を利かせて風邪にかかったのではないかと思います。

私にとってのパンジャープ調査は実に慌しかったが、誠に実り多いものでした。最大の収穫は、印パの分離独立の際に受けた不幸な大変動と1960年代末からの「緑の革命」の最中にあるパンジャープの村々に接して、それらは決して「停滞のインド」の姿ではなく、実にダイナミックに動いているのだという確信を得たことでした。私たちは一同、次の研究課題は「この動きだな」と語り合ったものです。石田先生も次は「緑の革命」と決め、インドを離れる前に南インドに飛んで、マイソール大学との共同研究の下交渉をしてこられました。

3. 「火中の栗を拾って」インド研究へ

パンジャープ調査から帰ると、私は全学の学生委員会副委員長として教養部や中央図書館の封鎖解除に走り回ったり、総合科学部の学生生活担当の学部参与として第1回生を迎え入れたり、毎日を忙しくしていました。インド調査は1回きりと思っていたので、次回の南インドについて気に掛けることはありませんでした。しかしある時、文学部で次の調査計画を進めていないことを知らされました。インド調査は文学部地理の最重要プロジェクトと思っていたので、石田先生に“長く中断していると再開できなくなりますよ。”と注進に及びました。いろいろ悩んでおられた先生の気持ちを知ってか、知らずにか…。しかも、なんべんも。当時、文部省の海外学術調査の予算総額はわずかで、採択率は非常に少なかったので、中断が長く続くと新規プロジェクトの扱いとなって、採択はなかなか難しくなると心配したものですから…。

広島大学のインド調査をまとめた年表が地誌研年報7号にあります。これは、1967年度から1998年度まで実施されたインド調査を、研究代表者ならびに研究内容によって第Ⅰ期から第Ⅴ期までの研究計画に分けたものですが、第Ⅰ期から第Ⅱ期の間に6年の空白があります。これは、そんなやりとりがあった期間です。“先生、やるべきですよ”と機会あるごとにせっついているうちに、“あんた、やってくれんかね”と逆襲される始末…。パンジャープ調査の石田隊長のご苦勞を思うと、私はその器ではないし、創設間もない総合科学部での内部事情からみても、簡単には引き受けられませんでした。そうこうしているうちに、たちまち2、3年経ってしまいました。やがて総合科学部の役職から解放され、私にも自分の時間がちょっと取れるようになり、また村上さんや中山さん達、インド・ベテラン組の強い後押しもあって、結局は私が研究代表者になって1978年度実施の研究計画

を総合科学部から申請することになりました。

研究課題は「南インドにおける緑の革命と村落変化—特に自然環境との関わりにおいて—」でした。調査地域を「南インド」、主題を「緑の革命」としたのは、前回のパンジャープ調査の終わりごろに、みんなでなんとなく決めていたからです。いわば、共通の認識があったからです。当初はインド半島を東西に横切るように、タミルナドゥ州・カルナータカ州・ケララ州を、1年おきに6カ年をかけて調査する予定でしたが、直前になってタミルナドゥ州で東京外大グループが調査を始めたことを知り、またケララ州についてはカルナータカ州マンガロール県（マラバル海岸）の調査で代替できるとし、結局、カルナータカ州だけに集中することにしました。この選択は結局、パンジャープでの教訓、つまり複数の州では政府交渉で多くの時間をつぶすことを避ける意味で正しかったと思います。

研究課題のサブタイトルとして「特に自然環境との関わりにおいて」を付けたのには、ちょっとした工夫がこめられています。文部省審査に採択されやすいように私の研究実績（自然地理分野）を明確にするためもありましたが、本当の狙いはインド政府の調査ビザを得やすくするためでありました。インドでは当時、インディラ・ガンディー政権が「貧困の追放」とか、銀行国有化といった社会主義的政策をつぎつぎと進めていたが、その強権的な手法に対する国内の反発が強まり、それに対して非常事態宣言が発せられたほどでした。それを批判する外国の厳しい論調もあり、インド政府は外国人研究者の入国に対して神経質になり、後でわかったことですが、調査ビザの交付をかなり厳しく制限してしまいました。私達は、社会科学系の調査に対して厳しいという情報をキャッチし、それを回避するために「自然科学分野」の研究であることを、サブタイトルだけでなく、調査項目のあちこちに強調したわけでありました。

申請した研究計画は幸い一発で採択されましたが、実施年度になると、私自身がまったく別の理由で文学部に移籍することになりました。それまで海外出張の事務手続きをやってくれていた総合科学部の事務の人たちに平身低頭して詫び、所属していた自然環境研究コースの同僚たちからは“前線離脱だ！”と叱られました。私自身、コース設立に当たってかなり働いていたので、同僚が怒るのも当然だったと、今でも申し訳なく思っています。

先ほど石田先生は、インド調査は“融通無碍にやった”と謙遜しておっしゃっていましたが、米倉二郎先生あの意気込みとは違って、私も初めは“ああ、やらざるを得ないな”という気持ちでした。広大なインド調査を途絶えさせてはいけない、つぎの人が引き受けるまで若い人を育てなければという一種の義務感もあったことも否定できません。私自身、自然地理学講座の担当としてやるべきこと、やりたいことはたくさんありました

が、それを犠牲にせずいぶん長い間、インドに関わってきてしまいました。私以上にインドに関わりのある中田高さんが、講座の方をしっかりと守ってくれたお蔭です。実はいま「関わった」と言いましたが、正確には「途中から没頭した」と言い直した方が適切かと思います。後ほどお話しますが、それは「干ばつ常習地域」を研究対象としてから特に昂じたように思います。

インド調査を「やらざるを得ない」理由がほかにもありました。それは、地理学研究連絡委員会主唱の「総合地誌研究所」の設置を広島大学が責任をもって引き受けるという約束があったからです。広島大学が米倉先生のインド農村調査を継続事業として実施していたのは、それは外国地誌研究のモデルとして内外に提示したかったからであり、その設立準備として些少ながら文部省予算もついていた。その芽を絶対摘んではいけないという義務感が、教室主任の石田先生にも、当時は教養部にいた私にもありました。ただ今になって悔やまれるのは、地理学研連の当初構想は“余りに大きすぎる。1, 2講座程度の増設でどうか”という文部省の話に、地理学研連に気兼ねして乗らなかったということです。独立学校法人となって大学間競争が激しくなっている昨今では考えられないことですが、当時としては「広島大学だけが旨い汁を吸って、研連の大構想の芽を摘んだ」という誇りを避けたいと悩んだ末での結論ではなかったかと思います。私にとってインド調査を引き継ぐということは、まさに「火中の栗を拾う」ようなものでした。

4. 何を、どのように調査するか：仮説の検証か、発見か

さて、私が研究代表者になった調査は、地誌研年報7号の拙著「広島大学のインド調査」にある表1の第Ⅱ期（南インド・プロジェクト）および第Ⅲ期（干ばつ常習地域プロジェクト）の6回です。この第〇期（〇〇プロジェクト）、第〇次という呼び方は、第Ⅲ期を終えた段階で広島大学のそれまでの仕事を系統的にみるために、私が勝手につけたものです。その後、村上さんの第Ⅳ期（人的資源開発プロジェクト）、岡橋さんの第Ⅴ期（工業化新展開プロジェクト）と続きますが、その時代時代の、インドの社会経済の進展に合ったテーマで、適切なフィールドを選んで研究しているようです。2002年12月に急逝された米倉先生が、生前に絶えず“皆さんがよく協力して続けていますね”と喜んでおられました。この表には多少のこじつけや誇張もありますが、われわれの仕事全体としてよく整理しているなど、自画自賛しています。

「いかなる問題を、どのような目的で調査したか」については、「広島大学のインド調査」に第Ⅰ期の米倉隊、石田隊の頃から書いてあります。石田先生は、先ほどのお話のよ

うにインド農村の Peasant とか、その共同体といった問題について仮説をもっておられ、それを現地において検証するという明確な目的をもっておられました。標本調査地では、隊員全体がその問題に対して集中的にアプローチすることになっていました。ところが、私はとなると、そうした検証すべき仮説など持ちあわせていませんでした。関心事はと強いて問われれば、1972年11月に初めてパンジャブの大地に初めて立った時に感じた強烈な印象でありましょう。それまで幾度も聞かされた「停滞のインド」とはかけ離れたイメージであり、土地も人々もいきいきと活気付いているではないか。雑誌『地理』にも書いたことがあります。高校地図帳ではあそこは冬の雨で小麦地帯となっているが、いま目しているのは黄金色に輝き、ゆったり揺れている稲穂の波なのです。「これは、いったい何…」と驚きました。よくコントロールされた灌漑水路が村内を四通八達し、2頭立ての牛で伝統的な犁をひく髯とターバンのシク教農民の脇で、大型のトラクターが忙しく走り回っている。貧弱な水路で、よく水争いをした郷里の田んぼよりずっと進んでいるではないか。その時、とっさに“よし！これを調べることにしよう”と思いました。誠に単細胞的な発想ですが、私のインド調査は「変化のインド」という仮説の発見からスタートしたというわけです。

約1カ月滞在したガガルバーナでは、私は「変化」というキーワードを自然環境の面から調べました。分離独立前は、村にイスラム教徒が住んでいたが、彼らは全部パキスタンに移ってしまい、代わってパキスタンからやってきたヒन्दウー教徒が集落地から少し離れたところで、水牛をたくさん飼って住んでいました。ミルクの生産のためです。また、村内各所ではチューブウェル（電動揚水井）から水がじゃんじゃん流れ、サトウキビや野菜がよく育っている。石田先生はしきりに“動いとるな。変わつとるな”としきりに感嘆しておられました。結局、隊のメンテーマもこれにしないといけなくなると、政府の農業開発政策が農村集落や農民生活にどのように影響しているかについて、重点的に調査することにしたわけです。問題意識としては、米倉先生の頃の「インド農村の特質」の研究から、石田先生のパンジャブ調査の後半には「緑の革命」によるインド農村の変貌が中心課題となったわけです。

そんな訳で、第Ⅱ期研究計画の南インドでは「地域変化」をキーワードにして調べることにしました。強いて言えば、これがわが隊の作業仮説であり、それをカルナータカ州内の二つの標本調査村（近代的な水路灌漑と伝統的な溜池灌漑）において比較考察しながら検証しようとするものでした。なお、地域研究計画における仮説検証型と仮説発見型の作業の流れについては、『総観地理学講座2 地理研究法』（朝倉書店刊）の拙著「地誌研究とフィールドワーク」に要約したフローチャートがありますので、参考にしてください。

5. インド調査の最初にして最大の難関は、調査ビザの取得

さて、インド側の大学に共同研究を正式に申し込むことになりましたが、その段階でとんでもないことが起こりました。南インド調査のカウンターパートについては、石田先生がパンジャブ調査の帰りにマイソール大学に立ち寄り“広島大学がこちらに来るから頼む”と協力を頼んでいたのですが、カウンターパート依頼の手紙をだしたところ、肝心のミシュラ教授は在籍していないという。いったい、どこへ消えてしまったんだと再度行き先を訊ねたら、なんと名古屋の国連地域開発センターにきていたんです。事の次第を話し、彼の代わりに同大学地域開発研究所のP. D. マハデーブ教授にカウンターパートになってもらうことにしました。あれには慌てました。

ところが一難去って一難来る…です。当初から心配はしていましたが、出発予定日が近づいてもインド政府の調査ビザがなかなか下りない。神戸のインド領事館も本国に問い合わせたけれど、許可・不許可はもちろん、遅れている理由もわからないという。ビザが出たら直ちに出發できるようにと隊員に指示し、出發日変更許可願いを2度、3度文部省に提出して、隊の庶務渉外担当の中山さんと広島暑い夏の一カ月を研究室に詰めて鶴首協議…。夏が終わるころ、出発予定から約1カ月遅れて神戸の領事館から電話が入ったときは、中山さんと手を取り合って喜びました。後でわかったことですが、調査対象地域でコレラが発生し、現地カルナータカ州政府はその終焉を待っていたらしい。1カ月余りを待たされましたが、州首相D. D. ウルスのサイン入り調査許可証は、その後の現地調査において水戸黄門の「葵のご紋」のような効力を発揮し、これを提示すると資料提供、宿舎斡旋などあらゆる方面で便宜を計らってもらいました。

さらに幸運なことがありました。当時は日本円がどんどん上がっており、申請書提出後一年間の円高によって調査員1名の旅費がしぼり出せそうでした。そこで、円高差益分で調査隊員を増やして良いかと、文部省に恐る恐る尋ねてみました。その分を返せと言われてないように…。それは構わないという。そこで急遽、大学院生の貞方 昇さんを期間限定で助手に採用してもらい、メンバーに加えることにしました。以後の2回、いずれも円高だったので彼に参加してもらいました。彼は帰国すると院生、出発前には助手を繰り返しましたが、当時の文学部教授会は今ごろとは違って鷹揚であり、研究活動に対してきわめて温かい理解がありました。貞方さんには隊の下働きのために、ずいぶん苦勞をかけました。一時は彼自身「死ぬんじゃないか？」と思ったこともあったようです。今ふと気付きましたが、あの円高の差益を他の調査隊はどのように活用したのでしょうか。私たちはまじめに、有効に活用しましたが…。

6. 先進地から後進地へ：南インド・プロジェクトの調査地域

調査隊の構成は基本的には石田先生のころのスタイルとし、これに南インドという地域性と研究テーマに合わせて若干の手直しをした程度でした。南インド・プロジェクト、つまり第Ⅱ期第1次の課題は「緑の革命」であり、北インドでの成功は南インドではどうなっているかというのが課題でした。緑の革命に対する過大な期待がある一方、当時すでに地域格差、階層格差を助長するものだという厳しい批判もあり、日本のインド研究者でも否定的意見が多かったように記憶しています。しかし、国民にまず食わせなければいけない、なんとしても食料を自給しなければならない、というインド政府の目標自体（まずパイを大きくする。そのために1966年から「高収量品種計画」いわゆる農業新戦略を発足させていた）が私達には理解できたし、パンジャブやハリヤーナーの村々を見たかぎり、農業で汚染した麦藁を食べた牛が死んだ、灌漑のやりすぎで地下水位が上がったなどの問題も起こっているが、それらは技術的に解決できることであること、それ以上に高収量品種や新しい農業技術を導入して農業を改善しようとする農民、いわゆる先進的農民の意識が向上しており、それによって閉鎖的な村落社会システムが変革している事実も認められることから、南インドでもその事実があるかをともかく現場で確認しようとしたわけでありました。だいたいどの国でも、ある政策や事業に対しては、賛成と反対はつきものです。海外地域研究者がそうした問題に取り組むときに必要なことは、行政資料や一部の言説だけに頼るのではなく、できるだけ現場に近づき、なまの資料から客観的に問題の本質をさぐる努力が必要ではないでしょうか。ただ注意しなければならないことは、余り近づきすぎて、つまり極端な参与観察になって、一方の声とか心情に溺れ、客観的なモノの見方、判断力を失わないことでしょう。それは単独・長期の滞在観察の際におちいり易い傾向ですが、私は村に滞在中、毎晩のミーティングによってそれを排除するようにしました。

このようなことを私がはっきりと言えるようになったのは、もちろんインドのフィールドワークの経験からと言えませんが、考えてみますと、私自身の生まれ育った郷里と無関係ではないように思います。私は東北の生まれですが、子供の頃は宮沢賢治の作品によく出てくる豊沢川（北上川の支流）がよく暴れました。そのつど、学校に行く途中の橋が流され、その後の復旧工事で1年の半分は遠回りをして登校したものです。そうかという、田んぼに水を引くのも大変でした。家は戦争中に始めたにわか百姓だったので、田んぼは台地の、しかも用水路の末端にあったため、水を引くのにえらく苦勞しました。当時、中学に入ったばかりでしたが、病弱の親父に代わってやったものです。そんな体験が

あったので、北上川流域が特定地域開発計画によって岩手が変わっていくのを見て喜んだものです。アメリカのTVAにちなんで、KVAとも呼ばれてね…。その頃は東北大学で地理学を学ぶようになっていましたが、特定地域開発に対する批判的な意見を耳にするたびに、私の先生の富田芳郎教授にならってカッカとしていました。先生はよく“現場を知らない研究者はだめだ。明治以来疎んじられてきた東北、日本近代化に搾り取られ、苦しんできた東北農民の声を聞かなければならない”とおっしゃっていました。地域研究で大切なことは、現地をよく調べ、人びとの生活を大切にして発言するべきであるということです。

そうした東北地方での原体験は、私のインド調査にかなり強く影響していたと思います。南インドの研究プロジェクト（第Ⅲ期プロジェクト）は、地誌研年報7号の拙著「広島大学のインド調査」にあるように、第1次の「南インドにおける緑の革命と地域変化」から、第2次の「干ばつ常習地域の農業開発と地域変化」、第3次の「多雨地域における農業開発と地域変化」へと変わっています。つまり、当初の「緑の革命」の先進地域から、発展の遅れている「干ばつ常習地域」、「多雨地域」へと変えていきましたが、その理由は第1次調査において南インドの農村における地域変化は政府の「農業新戦略＝緑の革命」政策とともに、1970年開始の農業事業計画によるところが大きいと判断したためであります。「農業事業計画」はインディラ・ガンディー首相の「貧困の追放」の具体的政策「新経済計画」の一環として1973年より「干ばつ常習地域計画」と改名し、山地・砂漠など「後進地開発計画」とともに事業を拡大・推進されたものですが、これに着目して現地の実証的研究をはじめたのはインドの国内外を通じてわれわれが最初ではなかったかと思えます。

経験の積んだ地域研究者といえども、初めて訪れる土地では謙虚でなければなりません。例えば先ほどのパンジャープの灌漑についても、イギリス統治時代から近代的に整備されており、地下水観測にも多くの実績があります。私は初めてデリーに到着したとき、吉田・応地さんの3人でインド中央灌漑局を訪問したことがあります。その時、担当者に笑われました。“インドはもう100年も前からやっておるよ。どうして君達は日本からやってくるのかね？”と…。十分に下調べもせずに行ったものですから、えらく恥をかいてしまいました。しかし、パンジャープ州のアムリットサル市にあった灌漑技術研究所を訪ねると、独立前からの地下水の観測資料が倉庫に土埃をかぶって山積みしてあるんじゃないですか。イギリス時代からの観測方法で、地下水位を村レベルできちんと調べ、帳簿に集計してあったのです。しかも、灌漑区域の地下水位分布を1865年、1892年、1911年、1937年に調査しており、印パ分離独立後の混乱にもかかわらず1959年にも行われてい

ました。赤茶けて薄汚れたブループリントの分布図を見つけ、それらが詳細に分析されずに放置されていることを知った時、私は心底しめたと思いました。早速、それらを整理してパンジャブ平原全域の地下水位の変化を分析し、それに基づいていくつかの論文を書き上げましたが（例えば『地学雑誌』）、あの仕事は現在でもインドの灌漑関係者の中でも評価されていると聞いています。インドの農村研究には水の問題は欠かすことができないテーマです。地理屋にとって水商売は非常にやり甲斐のある仕事であって、それをパンジャブで取り上げることができたことが、私をインド調査にのめり込ませる始まりであったかも知れません。

インドの研究者や役人はこちらが驚くほど詳しい統計数値をあげて大きな議論をしますが、それらは州レベルか、せいぜい県レベルの議論にすぎません。それより下位の行政区、タルク（郡）ないしブロック（地区開発事務所、BDO）とか、村レベルのデータを自ら集めて、分析するといった地味な仕事はどれも苦手なようです。パンジャブ平原の灌漑-地下水問題でもそうでしたが、農村開発の問題でもそのような弊風がみてとれました。われわれの村落調査が全戸の悉皆調査から始めたのは、そうしたインド地理学や農村開発の研究状況からみて、それが不可欠であると考えたからであります。

インドを訪ねると、とかく疑問に感じ、不合理に思われることが多すぎます。つい批判的になり、そのことを書き物にしたいくなります。一般の旅行者なら許されるでしょうが、いやしくも研究の場に籍を置く者はそれをやってはいけません。現地で見たり聞いたりして、こうではなかろうかと一応の仮説を持ったとしても、それを検証せずに論文にして発表してはいけません。許されるのは、せいぜい研究途上の討論資料としての「研究ノート」くらいでしょう。1980年代に入ると、わが国でも海外に出かける地理学者が多くなりますが、東大の吉川虎雄先生が“海外調査といっても、外国人のペーパーを持ち帰って満足している例が多い”と慨嘆されていたことがありました。それに対して、“一概にそうは言えません”と言って、私達のインド調査を例にして一応は反駁しましたが、あの当時は先生の批判もあながちはずれていると言えない状況でした。川喜田二郎先生がさかんにフィールドワークの大切さを強調されていた頃です。そんなこともあり、私は地理学者のフィールドへの関わり方について一文を書いたことがあります（『総観地理学講座2 地域研究法』朝倉書店刊, p.10）。

7. 調査対象とは「付かず離れず」の関係

われわれの農村調査の特色は、調査助手兼通訳のインド人大学院生を含む10数名全員

が、約1ヵ月の間、村はずれの施設または近傍の町に泊まり込んで集中的にやる方式でした。10数人が泊れる宿舎が村内にはなかったし、たとえ確保できたとしても、多人数、長期間の滞在となるとさまざまなマイナス面があるからです。調査の前半は、集落や土地利用の基本図の作成、全戸の世帯・職業の悉皆調査をみんなで手分けしてやり、土地台帳や課税台帳、さらには各種開発事業に関するBDO（地区開発事務所）の資料も、所長を拝み倒すようにして借り出し、インド人大学院生とともに翻訳・転写したものです。夕食後のミーティングは、各自の成果を出し合って調査の洩れ、重複などをチェックし、問題の所在を摘出し、翌日の仕事を決めるというものです。日中の聞き取りで疲れた体にとって、辛く眠い仕事でした。でも、問題はできるだけ現場で発見し、その場で解決しておくのが、再調査がままならぬ海外調査の鉄則であります。私たちのように多人数の調査の場合は、これは特に大切です。ミーティングから生まれた発想は少なくありません。例えば、ある村では村落開発事業で集落内に簡易水道が新設され、村内に配水管が張り巡らされた。外見的にはそれだけのことですが、下位ジャーティの人が同じ水を飲めるようになったと喜んでいたという報告があった。それは、ジャーティ別の井戸によって村民を厳しく差別していたセグリゲーション（居住隔離）など、伝統的な村落構造や村民意識を突き崩す動機になるのではないかと、よしその辺のことをよく調べようということになるわけです。それについては、私が石田先生の退官記念論文集『地域—その文化と自然』に書かせてもらった「デカン高原南部地方の集落とその変貌」でも報告しております。

上記論文に掲載しているチッカマラリ村の家屋移転図も、同じようにミーティングの議論から生まれた仕事であります。独立直後は、この集落の中心部には有力ジャーティの住居がかたまり、その脇にハリジャーと呼ばれていた貧困層（主として農業労働者、指定カースト）が草葺きの粗末な小屋に住んでいました。ところが、われわれが調査した1970年代後半、道路沿いや耕地近くに新居を構えて移り住む農家が現れるようになりました。移転の理由を聞くと、その方が農作業に便利だという。つまり土地改革による農民の自作農化と商品作物（さとうきび）の導入によって、経営に都合のいい場所に住むようになったのであります。従来のジャーティ別居住形態から、農業経営重視の居住形態に移行しているという現象です。また、アバディ（主集落）に近接して「土地なし家なし」貧困層向けのジャナタハウス（人民住宅）の提供（建物の4分の1のみが低利ローンつきの自己負担、土地代を含む他は一切無償）が進んでいましたが、そこではいろんなジャーティが混ざり合って住んでいました。村長に聞くと、国の方針でジャーティ混住が絶対条件ということでした。インド村落の特徴といえば、日本の教科書では今でもジャーティごとの共食とか、居住隔離が強調されていますが、それらがどんどん解消されている事実を、この私

の論文は最初に見出し報告したことになります。この図を英文で公表しましたが、日本ではちっとも反響がありませんでした。日本語で書かないといけないかなと思っていたところ、大分後になって亡くなられた駒沢大学の菱口善美さんから、イギリスの地域研究のテキストにインド農村の変貌の例証として使われていますよと教えられました。石田先生がおっしゃられるように、英文で報告した効果があったわけです。

また、こういう笑い話もあります。私達は村に入ると、村人に調査の趣旨を説明し協力をお願いすることにしていたが、あれは1982年の西ガーツ山麓のナラビ村でしたが、ちょうどその頃、インディラ・ガンディーが総選挙を前に「貧困の追放」政策を掲げて、村内の国有林を「土地なし家なし」貧困層へ住宅用に気前よく無償供与していました。そのとき、たまたま日本から鈴木善幸首相がインドにやってきて、何かの援助をすることを約束し、それが新聞にのつたらしい。村人はわれわれの調査をその対象地選びと勘違いしたらしい。“それとは関係ない”と打ち消すのに苦労しました。第Ⅱ期の南インド・プロジェクトは、インディラ・ガンディー政権が念願の食料自給を達成し、さらに貧困追放を掲げてIRDP（総合農村開発計画）を展開していた時期だけに、農村はどこでもその政策的影響を受けて変化していました。したがって、第Ⅱ期研究計画の結論は、「停滞のインド」とはとんでもない、「インドは変わる、変わらない」の議論ではなく、「どのように変わっている」か、その政策評価をするようなものでした。そのことを、1984年のパリの国際地理学会議で中山さんに報告してもらいました。

私は何かの理由で出席できませんでしたが、中山さんが帰ってきて話すには、インド人研究者から“それは特別なケースだ”というような発言があったとのこと…。とんでもない誤解です。広島大学は米倉・石田両先生の北インド調査以来、調査地の選定についてはさまざまな自然的・社会経済的指標を用いて慎重にやっていますが、南インドでもこの表（総合地誌研究叢書17号『海外地域研究の理論と技法』p.9）のように1978年には独立前からの灌漑農村で、新品種稲作とサトウキビで活気のある村、80年は4年に一度の干ばつを受け、DPAP（干ばつ常習地域開発計画）を受けている村、82年は逆に夏の降水量4,000mm以上を記録する西ガーツ山地の、HADP（丘陵地域開発計画）の村というぐあいに、あらゆる条件の地域を対象として調査していました。“特殊なケース”とはとんでもない発言です。石田先生も前に話してくれましたが、マイソール大学で講演をされた時、あるインド人女性研究員が“私がそれを言っても、みんな相手にしてくれない”とこぼしていたそうです。国際会議に出かけるほどの地理学者ですら、むしろそういう有力学者ほど、自分の国で「いま何が起きているか」を知らないのではないかと思いました。

私自身、インド調査を重ねていくうちに仮説発見型から仮説検証型になっていきましたが、対象地域を変える場合はできるだけ先入観を抱かずにアプローチすることにしていきます。アプローチの仕方は石田先生から私、私から村上さん、そして岡橋秀典さんへと少しずつ変わってきましたが、フィールドを大事にするという点では、広島大学の研究者は不動です。

8. “よくぞ、殺さずに済んだ” インド僻地の調査

インド農村調査で隊長（研究代表者）としてもっとも責任があり、心配していたのが、隊員の健康管理です。インド旅行で「なま水、なま物」を口にしていけないのは常識ですが、農村調査ではついそれを踏み外すことがあります。1972年のパンジャブ調査の際、私はそれをやりました。「緑の革命」の核心地ルディアナのレストランで、インドに来て初めて注文したマトンを食べて…。フォークを当てた時、これはちょっと半焼きだなと思ったが、久しぶりの肉なのでべろり…。宿に帰って念のために正露丸を飲んだものの、夜中から激しい下痢…。あの時は完全絶食を3日ほどやりました。仕事は休みませんでした。何しろ駆け込む場所はいくらでもありましたから…。それで懲りたのか、以後は健康の自己管理を徹底的にしました。

デカン高原の村では、風化土層から汲み上げる水ですから、飲み水については、どの村でも大変苦労しました。その苦労はパンジャブ平原の比でありませんでした。1980年からの干ばつ常習地域の調査、特にイェルドーナ村では本当に大変でした。灌漑事務所の宿舎脇は広場になっており、そこに住民との共用井戸がありました。準平原上の地下水なので、深さは10mたらずであったでしょう。村での調査中、私の重要な仕事は子供たちと遊んで、村人とのコミュニケーションづくりに努めること、また安心して飲める飲み水をつくることでした。水づくりはまず夜のミーティング前に沸騰させ、火を止めておく。ミーティング後に表面の油膜をすくい、底の白濁部分を捨てて、2度目の沸騰をさせる。翌朝、さらに油膜と白濁を除いて朝食に使う。また3度目の煮沸をさせて、みんなの水筒に入れる。水筒は軍隊用の布でカバーしたやつで、熱湯でも大丈夫。水だと何遍でも飲みたくなり、お腹をこわすので、お湯か、お茶に限る。

イェルドーナ村では、共用井戸の排水路が壊れ、廃水が地下に浸透して汚染している可能性があったので、この水づくりの手順を特に入念にしていたのですが、それでもあの井戸水が悪かったらしい。最初に倒れたのが貞方さんで、真夜中にお腹を抱えて苦しんでいる。痛みが少し落ち付いたところを見計らって、車で40km離れた町の病院に運び込ん

だ。幸い当直の医師がいて、原因はアメーバ赤痢とのこと。灌漑水がきてから急に流行するようになった灌漑区域の風土病だという。2日ほど休んで落ち着きましたが、代わって中山さん、米田 巖さんと数日おきに腹を抱えてダウン…。不思議なことに私だけが大丈夫…。胃袋が強いのでしょうかね。心臓じゃなくて…。あの時はわが隊の最大のピンチでした。

先程話にてた西ガーツ山麓のナラヴィ村では、まったく反対の悪い環境に苦勞しました。村に入ったのがモンスーン・シーズン後半の8月中旬、アラビア海から送られてくる湿気は西ガーツにぶち当たってつぎつぎに黒い雲に成長…。予想してきたとは言え、まあ～降るわ、降るわ。昼過ぎから物凄い雷鳴とともに必ず土砂降りの襲来…。郡役所の記録から年間4,000～6,000mmの雨量とはわかっていたが、研究課題は多雨地域であるので、敢えてこの時期を選んでやってきたわけだが、余りのすごさに驚きました。高橋春成さんが野生生物調査のために国有林管理の職員の案内で熱帯湿潤林に入ったが、蛙の猛襲にあってあちらこちらを真っ赤にして帰ってきました。私も川向こうの農家でお茶をご馳走になっていたところ、ざあっ！ときて、西ガーツからの谷川はみるみる増水、もう帰れないですよ。水が引くまでと夕食をご馳走になりました。しかし、雨があがった時の夕陽のきれいなこと、汗と雨でびしょぬれの調査を終え宿舎までの8キロの帰り道、みんなで「夕焼け小焼けの…」と歌いながら帰ってきたものです。帰国後に村の診療所で頂いた1年間の診察記録を、広島大学医学部の寄生虫病専門の辻守康先生に見てもらったら、“アフリカでもこんなひどい所はない。人間が住むところではありませんヨ”と言われました。

停年で広島大学を辞める最終講義で、“ああ、よくぞ一人も殺さずに済んだ…”と、つい洩らしてしまいましたが、それは本音でした。石田先生は先ほど、広島大学のインド調査を“身を挺して引き継いだ”とおっしゃっていましたが、私たちの場合は文字通り「命を賭けて」インド僻地の調査に取り組んだと言っているかと思えます。

9. 地理学再生のため、フィールド調査に取り組む

私は当時、よく友人から“なぜそれ程までに、自然地理の君がインドの農村にのめり込むのか”と訊ねられました。“インドが好きになったからさ…”などと、当たり触らずの答えをしていましたが、実はあの頃の地理学に「危機的状況」を感じとっていたからです。当時は計量地理学隆盛の時代で、若い人達のフィールド離れがどんどん進んでいた時代でした。それは日本だけの現象ではありませんでしたが…。石田先生は「地誌の再生」を唱えて頑張っておられたが、どう見ても振るわない。個人の名は控えますが、地理学出

身の人でもちょっとマスコミに売れると、専門は文化人類学とか、〇〇地域研究とかと
 いて、「地理学」の名を出そうとしない。「地誌」なんかは、教育の分野はともかく、若
 い研究者にあつては死語同然でありました。そうなった背景には、地理学自体にも責任が
 なかったわけではありませんが…。そういう時代でありました。

ところで、日本のインド研究は伝統的に文献研究主体の哲学や社会学・歴史学において
 強く、地理学や文化人類学などフィールドに入つての仕事は、福武・大内・中根さんたち
 の「インド村落の社会経済構造」はあつたものの、全体としてさびしい状態でありまし
 た。1970年代以降、インド農村を組織的に調査していたのは、広島大学ではなかつた
 かと思います。先ほどは、広島大学がインド研究を続けたわけを地理学研連提唱の総合地
 誌研の設立にからめて説明しましたが、より大きく私をインド調査に駆り立てたのは、地
 理学の当時のフィールド離れを何とか食い止めなければという「意気込み」からではな
 かつたかと思います。石田先生の「地誌の再生」と同じように…。

私が広島大学を定年退官する直前に阪神・淡路大震災が発生しました。それ以来、広島
 県や広島市の防災関係の仕事に忙殺されていますが、その仕事をしながら「自分は、やは
 り地理屋だなあ〜」と感ずることがよくあります。学問論として地理学の独自性とか存在
 価値を議論することも大切であります。ほかの学問分野の人々と一緒に仕事をし、地理
 学の有効性を自ら確認し、他分野の人々にも認めさせる努力も不可欠ではないでしょう
 か。地理屋ならではの発想や手法が社会的に評価され、否応なく地理屋としての自分を再
 発見させられるからです。私が最初にそれを感じたのは、南極観測隊に参加したときで
 す。白一色の大氷原を走り回りましたが、同僚に地理屋はどうしてコースをうまく見つけ
 だすのかと感心されたものです。なんの変哲もない（と、ほかの人は思うらしい）白一色
 の大氷原にも、微妙なうねりやサスツルギという微起伏があります。それらによって、基
 盤岩の起伏、風の方向や強さ、積雪量の変化などを読みとり、それらを空間的に総合す
 ることによって、自分たちがいる場所を確認することができました。ほかの隊員からは藤原
 の動物的な本能などといわれましたが、そうではなく、学習によって身につけた地理屋独
 特の知能と言ってもいいでしょう。そうした空間的な思考能力は、フィールドと地図で鍛
 えられた地理屋が備えている技能ではないでしょうか。数年前の雑誌『地理』に、そうし
 た地理的な総合化の技能でもって昭和基地—南極点間の2,600kmを往復調査し、東南極
 の氷原を地域区分したことを書きました。

先ほど名前がでた菱口さんは地理学以外の人々とよく仕事をし、高い評価を得ていま
 したが、彼の論文にはきわめて緻密で、しかも人間味のある地図が多かったですね。そのこ
 とを彼に指摘すると、“地理屋は地図が勝負ですからね。地図で考え、地図で主張しない

とね…”とつぶやき、“共同研究のなかで地理学がいかに総合化の役割を發揮するかを、他の学問分野の人は期待しているんですよ”と言っていたのを思い出します。総合地誌研究叢書17『海外地域研究の理論と技法』のなかで、広島大学がこれまで調査した村について、さまざまな地図を用いて説明しているのは、そうした意図から編集したものです。

繰り返しになりますが、私の念頭から離れなかったのは、他の学問分野とは違ったインドへのアプローチとか、インドの既成概念を地理的なフィールドワークによって払拭したいということではなかったかと思います。こんなことを言うと、私のインド調査は石田先生からの「単なる中継ぎ」ではなくなりますね。あの頃は若かったので、不振の地理学に憤憤し、ついそういうことになってしまったようです。自然地理学講座の教授の仕事をはたらかして…。最大の被害者は、講座の仕事を預けられた中田高さんでした。

10. 海外地域研究には、「継続すること」が大切

以上の話によって広島大学は「なぜインド調査を長く続けてきたか」がお解りいただけたかと思います。しかし、もう一つ付け加えるべきことがあります。インド調査をやっているうちに、私は「海外地域研究には《継続性》が大切である」という、信念めいたものをもつようになったことです。地域研究には「調査する側」と「調査される側」があります。これまで話したことは、調査する側の都合にすぎません。調査される側に対して、われわれはどのような姿勢、接し方をとるかについて考える必要があります。地域研究という学問の出自に「醜い」面があることは、海外で地域研究をしようとする者は誰でも知っているはずだが、私たちはとかくそれを忘れがちであります。1960年代、アメリカはミシガン大学を中心にインド研究を徹底的に行い、その成果の一部は『南アジアの歴史アトラス』となって公刊されています。しかし70年代後半から、アメリカ人のインド研究は頓挫してしまいます。表面的には両国の外交関係の悪化が理由とされていますが、底流にはCIAもどきのアメリカ研究者の研究活動に対するインド政府の嫌悪・警戒があったと聞いています。それを決定的にしたのはボパールのアメリカ系農業工場の事故とその調査のやり方でした。インディラ・ガンディー政権はカンカンに怒って、アメリカだけでなく外国研究者の調査活動にも厳しい制限を加えるようになったのです。先ほど石田先生から名前がでたハワイ大学のB. J. マートンさんを総合地誌研の南アジア研究のシンポジウムに招待したとき、「われわれはインドでは調査ができない。」とぼやいていました。私達の南インド・プロジェクトの初年度に、カウンターパートのP. D. マハデヴさんが、私達のほかにアメリカのある大学と共同研究を組んでおられました。私はマハデヴさんを含むインド

側全員に、村に必ずきて調査してもらうことを条件にしていますが、アメリカ側はどうしているかと聞くと、1日だけ大学で研究打ち合わせをただけで、あとは1週間、近くの遺跡を見物しただけで帰ってしまったそうです。傍で私達のやり取りを聞いていた高校生のお嬢さんは“あの人たちはいいかげんね？”と批判していましたが、親父さん（教授）の方はアメリカ側の“共同研究費は〇〇ドルでね…”と、われわれの10倍ほどの金額を言っていました。少々いやな感じもしましたが、通じない振りをしたのを覚えています。いま考えると、彼らは観光ビザで入ってきたので、あのような行動しかとれなかったのではないのでしょうか。

インドではきちんと申請し、「ACADEMIC PURPOSE ONLY」のスタンプを押した調査許可を手に入ればしめたものです。州政府をはじめ各レベルの官庁から資料提供などの協力を得られるからです。インドでは「学術研究」という言葉は権威があり、官民を問わずごく敬意をはらってくれます。日本ではちょっと考えられないほどの待遇です。

「継続性」の大切さは、カウンターパートとなった大学や研究者に対しても同じです。米倉先生の時にはヴェナレスのパナラス・ヒンドゥー大学、石田先生の時はパンジャブ大学、私の時は南アジアではマイソール大学、北インドではジャワハルラル・ネルー大学、西インドではプーナ大学が共同研究を引き受けてくれました。午後のティータイムなどでよく学科のメンバーに紹介されましたが、そんな時、かつて日本人と一緒に仕事をしたことのある方から“〇〇先生はどうしているのでしょうか？”と消息を訊ねられることが少なくありませんでした。そのたびに“プロジェクトが済んでも、義理を欠いてはいけないな”，と思ったことです。われわれの場合、現地調査で苦楽をともにしたこともあり、若い研究者や大学院生たちも相互に親密な関係を持ち、今でも交流を続けている人が多いです。若い人達には、これまで調査した村を共通の定点観測点として、インド農村の変貌を追跡調査してもらいたいものと思っております。村上さんの第IV期には、いくつかの村での追跡調査を完了済みであります。こうした息の長い調査研究は個人レベルでは限りがあり、大学の組織があつてこそ可能であると言えましょう。その拠点が総合地誌研であつたのです。世代が代わろうとも、継続してもらいたいものです。

11. 北インドと南インドをつないで：第Ⅲ期プロジェクトはじまる

南インド・プロジェクト（第Ⅱ期）の2年次には、カルナータカ州中部の干ばつ常習の村を二つ調べましたが、それだけではインドの干ばつ問題の全体像を把握できたとは言えません。もう少し事例を増やさなければということで、第Ⅲ期プロジェクトではデカン高

原中部の干ばつ常習地域に着目しました。図1に示した広島大学インド調査の対象集落の図で●印が第Ⅰ期、◎印が第Ⅱ期に調査した村ですが、両者には含まれたラージャスターン、マディアプラデシュ、マハーラーシュトラの3州には、広島大学はまだ足を踏み入れていませんでした。ところが、この未調査地帯にはインドで最も干ばつが頻発する村が広がっています。よし、第Ⅲ期はここをやろうということになり、あたかも基盤に石を並べるように、第Ⅰ期の北インド、第Ⅱ期の南インドの間から7つの標本調査村を選び、1986年から「干ばつ常習地域プロジェクト」として研究計画を申請しました。それが、図1に★印をつけている村であります。当初は、一つの州の2カ村を、全員が集中的に調査する南インド方式でやる予定でしたが、初年度のラージャスターン州から躓いてしまいました。インド政府の調査ビザがなかなか下りなかったためです。

出発予定の7月中旬から年度内実施が可能な12月初めまで、神戸のインド領事館を通じ、またジャワハルラル・ネルー大学 (JNU) のカウンターパート (R. C. シャルマ教授) が直接インド政府外務省や文部省に出向いたりして督促しましたが、先方でも遅れている理由がさっぱりわからない。南インドの時は在マドラスの日本領事館が総領事自らいろいろ動いてくれましたが、今回は文部省を通じて在デリー日本大使館に便宜供与書類を送っていたにもかかわらず、動いてくれている形跡は少しもない。その間、隊員はスーツケースに荷物を詰め込み、何時でも出発できるようにしながら講義をしていました。廊下で同僚と会うと「あれっ！もうインドから帰られたんですか？」。

シャルマ先生の奔走でやっと解ったのは、中央政府の担当部門 (内務・文部・外務) はOKだが、肝心のラージャスターンの州政府と軍司令部からの返答がないため、外務省東アジア課も調査ビザ発給の許可を神戸に送れないでいるが、年明けに許可できるであろうと言っているとのこと…。それを信じていいのやら今一つ確信がもてなかったが、ここで断念しては広島大学のインド調査が途切れてしまうと思い、米田さんや中里亜夫さんたちと相談し、最後まで粘ろうということにしました。それまでの交渉経過は逐一、文部省国際学術課に報告していましたが、12月も終わりに近づき年度内実施は不可能となったので、インド政府との交渉経過とインド政府の審査手順の変更などを添付し (文部省科学研究費・国際学術研究「海外学術調査ニュースレター」NO.13参照)、年度内に調査ビザが取れそうなので次年度の実施を認めてくれるように頼みました。科学研究費は原則として年度内に実施できなければ返上ということを承知の上で…。事実、その年もインド入国を果たせずに、調査を他の国に移したり、調査計画そのものを放棄したグループがいくつかあったと聞きます。また、かつて観光ビザで入って見つかри、途中で帰国させられた最悪の例も知っています。交渉経過を逐一報告していたわれわれの誠意と努力が評価されたの

か、翌年度の実施が認められました。

12. 「今世紀最大の干ばつ」のなかで

年も改まった2月初めに調査ビザを手にし、予定より1年遅れの1987年7月、私はニューデリーに到着しました。先発隊の米田さんと牧野一成さんが空港ロビーに迎えてくれましたが、彼らの顔を見てびっくりしました。1週間の間にげっそりやせかけていたからです。“どうしたんだ”と聞くと、“暑さで眠れない”とのこと。昨年から雨がまったく降らず、タール砂漠の方から熱風が吹き込み、その上電力が不足して夕刻から宿舎（国立教育研究所のゲストハウス）の扇風機は動かないそうだ。なるほど、デリーの空は砂漠からの砂埃で赤くかすんでいる。インド文部省と外務省に挨拶回りをし、警察等への必要な手続きを済ませ、早々に調査地のラージャスターンの州都ジャイプルに移りました。

州政府にシャルマ先生と一緒に全員で挨拶に行ったところ、去年はパキスタン国境に軍隊が展開していたので外国人の立ち入りが禁じられていたこと、今年も2年続きの干ばつのため、被害の軽い北東部のアバネリ村は調べてもいいが、もう一つの砂漠の村カジャレは許可できないとのこと（後に、立ち寄るだけを許されて訪れたが、農地は流砂で蔽い尽くされ、400頭ほどいた牛は100頭以下に減って、男達のほとんどは職を求めて他所へ出て、村は死んだように静まりかえっていた）。JNUでシャルマ先生の教え子であったという農村開発局次長（女性）が同席していたが、彼女の助太刀がなかったなら、私たちのラージャスターン調査は今年も実現できなかったのではないかと思います。第Ⅲ次プロジェクトのラージャスターン州やマディアプラデシュ州では、南インドのような大らかさはなく、州政府の調査許可書を提示しても出先官庁の役人の対応はそっけないもの、とくに県警察の消極的態度（外国人滞在は安全上問題ありとの理由）や目に見えない公安の徘徊（ちょっとした瑕疵を捉え、お目こぼしをせしめてやろうとの魂胆）は私達に無言の圧力となっていました。それは、絶えず西方からの侵入民族に蹂躪されてきた歴史の故か、タール砂漠の厳しい風土のためか、はたまた隣国パキスタンとへの警戒が理由なのか、恐らくそれらすべてが重なり合っているだろうと思いました。そんな状況のもとで、広い人脈をもつシャルマ先生は粘り強い交渉によって、難局をそのつどクリアしてくれました。思えば、彼をカウンターパートに依頼したのは、私がラージャスターン州の灌漑開発に関する彼の論文を読み、北インド・プロジェクトに適任と思って手紙一本で依頼したのが最初ですが、その狙いは正解でありました。私の後を引き継いだ村上隊、そして現在の岡橋隊も彼のお世話になっています。私はもちろん、今でも家族付き合いをしています。

アバネリ村の調査は、BDO（地区開発事務所）の斡旋で村近くの町に部屋を借り、1カ月滞在して行いました。連日の暑さはすさまじいものでした。いつものように蚊除けのネットを部屋の入り口と窓に貼り付け、蚊取り線香を燃やすわけですが、天井をゆっくり回転する扇風機はいたずらに40度近くの熱風をかき回すだけ、とても眠れない。JNUと地元ラージャスターン大学のインド人大学院生たちは、屋上にごさを敷いて悠々と寝ていました。それを見習って、われわれも庭に蚊帳を吊って横になったが、とたんに蟻の猛攻撃を受けるしまつ…。私は例の水づくりを隊長の天職(?)と心得て、みんなの水筒にお湯を詰めることに励みました。しかし、仕事の分担は公平にと気を付けていたつもりでしたが、自然に若い人に負担が寄るものらしく、一番元気だった牧野さんが原因不明の高熱となり、1週間ほど休養せざるを得ませんでした。私はこんな状況ではまともな調査は無理と思いながらも、このまま退却するのも癪なので、隊員たちには“予定通りに仕事をしようとするな。ここに滞在し、世紀の大干ばつを体験することこそ何よりの研究だ。達者で日本に帰ろう”と、むかし見た竹山道雄原作の映画「ビルマの堅琴」を思い出しながら皆にプレーキをかけましたが、各自はそれには構わず、ずいぶん頑張っていたようです。そんな時のある日、岡橋さんと学生の笠谷健太郎君がひょっこり宿舎にやってきたのには驚き、かつ感激しました。あの酷い状態を見て、二人はさぞびっくりしたことでしょう。実は、私は次の調査隊に岡橋さんを引き込もうと思っていたので、この酷さを見られてしまったので、断わられるんじゃないかと心配したものです。しかし、広島に帰ってお誘いしたら、いとも簡単にOK…。これで、次へのバトンタッチができたと確信しました。

アバネリ村での自然環境班の最大の課題は、2年続きの干ばつに対して農民はいかに水を確保し、作物管理をしているかでした。作物管理の方は、生物生産学部の安藤忠男さんが村内の主要土壌タイプごとに、またサンプル農家の畑のあちこちにピットを掘り、精力的にやっておられました。村の主作物は天水依存のミレット（雑穀）作でしたが、1970年代後半から動力揚水による地下水灌漑が普及してきました。初めは先進的農民のみが深さ7、8メートルの既存の飲料用開放井戸に揚水ホースを突っ込みディーゼルエンジンで汲み上げていたが、農村電化の進行によって電動ポンプが普及すると、競って新規に井戸を掘るようになりました。私たちの調査はまさにその頃であり、その上2年続きの無降水で、地下水位はどんどん低下している状態でした。私と牧野君は水準器を担いで村内の地盤高図を作成し、それに井戸の位置を記し、それぞれの水位の実測と2年前の水位の聞き取りを行い、地下水位の急激な低下を実証しました。40度近い炎熱の下での仕事でしたが、井戸水を頭からぶっ掛けながら、なんとかやり通したという感じです。

13. プラーミンの村アバネリの様変わり

暑さで何かと苦勞させられました。あのアバネリは面白い村でした。なぜかという
と、この村はもともと、9世紀頃につくられたヒンドゥー寺院を囲んで成立したプラーミ
ン主体の村落で、イスラム侵入時の破壊を受けながらもラージプート領主の村として存続
していたが、独立後の土地改革でプラーミン地主も自営農民化し、さらに最近グジャー
(伝統的生業は牧畜) 農民の先進的経営に刺激されて、彼ら自身も農業経営に本格的に取
り組むようになり、村落全体の経済的・社会的変化がはっきり認められたからです。村落
変革の推進役は選挙で選ばれた議員から構成されたパンチャーヤト(村会)であります。
その話し合いに臨席したことがあります。村長が道路整備に不熱心だと議員にやり込め
られていました。独立前のインド村落はタルク(徴税村)と呼ばれていたように、租税徴
収の単位にしかすぎませんでしたが、独立後は政府の経済社会開発が執行される最前線に
位置づけられていました。その模様は南インドの調査ですでに実証してきましたが、アバ
ネリ村ではそうした村落開発に対する村長・村会の役割、例えばBDO(地区開発事務所)
への働きかけなどについてさらに詳しく調べました。私は村びとの家に時々泊らせていた
だきましたが、たまたま国政選挙が近づいていた時でしたので、村人は茶店などでどの政
党を支持するかで喧々がくがくの議論をしており、日本の場合よりオープンだな〜と感心
させられました。かつて広く行われていたという、有力者による村ごとの票の取りまとめ
などは認められませんでした。

日本では人権問題や個人情報保護などの理由から、近頃は国勢調査すら問題になって
いますが、私達はインドのどの村でも世帯の悉皆調査や人口の動態調査などを、村人の協
力を得て実施することができました。全員が手分けして聞き取った調査票を毎晩集計し、
簡単な分析を加えることにしていたが、思わぬ発見をすることがよくあります。例えば、
アバネリ村では村域を越えての人びとの移動が殊のほかはげしいことを、岩崎公弥さんが
気づきました。プラーミンの場合、次・三男は妻と子供を村に残してジャイプールやデ
リーで働いているケースが目立ち、なぜだろうということになりました。いろいろ調べた
ところ、村に籍を残しておかなければ(妻子を残す)土地改革の際に分与された耕地を保
持できないためとわかりました。それには、古くからの合同家族制が活きているからで
しょう。彼らは村外労働で得た金銭を灌漑井戸の掘削など農業投資に充てたり、家の新築
に振り向けていました。そうした村外からの刺激を受けて村内の農家も農業経営の改善に
めざめ、灌漑井戸を掘ったり、サトウキビなど商品作物の導入を図るなど農業収入の増加
を図っていました。

アバネリ村のグジャーは世帯数こそ少ないが、農業経営の規模と意欲は他のジャーティから抜きん出ています。かつて彼らの多くは小作人であったが、土地改革によって自作農となり、現在はさらに耕地を広げて先進的な農業経営に専念しています。その先進性と資金の源泉はどこにあるだろうかと思い、米田さんを中心に調べてみましたが、それは現在の行政村の枠組みを越えて広がる、伝統的なジャーティ・コミュニティの結束にあると判断しました。その例証の一つは通婚圏であり、散居形態で生活する彼らはアバディ（中心集落）との間に血縁の関係はほとんどありません。彼らの社会的帰属意識、もしかすると経済的依存関係もアバネリ村よりグジャー・コミュニティに傾いているとすら思われることもありました。私達の滞在中、偶然にも年一度のグジャー・コミュニティの集会がアバネリの広場でありましたが、1,000人を超える老若男女の顔にはコミュニティへの帰属意識と幸福感が満ち溢れていました。1970年代後半から始まり80年代半ばから全国的に展開されているIRDP（統合農村開発計画）が、このようなインド農村社会の伝統的結合にどのような影響を与えているか、それがプラスなのか、マイナスに結果するか、私たちはいろいろ議論したものです。

私達はアバネリ村の調査を終えた後、第2の調査村としていたラージャスターン州南部のカジャレ村に向かいました。ただし、この村の調査は前述したように干ばつ被害がひどいため許可できないが、訪問程度なら構わないということだったので、干ばつ被害激甚地域の視察という名目で、ジャイプール→ジョドプール→ジャイサルメール→ビカネール→デリーのコースを、マツダの現地合弁会社が運転手付きで3カ月の間貸与してくれたタイタンを駆って走り回りました。カジャレ村の惨状、行き倒れの牛に群がる禿げ鷹もショックであったが、飲み水が枯渇した村々を2日おきに巡回する給水タンク車、飼料用の麦わらを満載して北部のパンジャブから南に急ぐトラックの列、砂嵐の中で主要道路をふさぐ砂の除去や乾ききった溜池の底浚いに励む男女の群れ（干ばつ時に村人の現金収入源として実施）などを目の当たりにし、干ばつに対するインド政府の緊急対策の進展を実際に見ることができました。これは、私にとって大きな収穫でした。と言うのは、7月半ば、調査地に向けてデリーを出る前、三菱商事・住友商事の現地事務所の方に、干ばつ被害の情報収集のためにインドの主要新聞3紙と数社の週刊誌を保存して頂くことにしていたからです。デリーに帰着後、さっそくそれらをホテルに運び込み、7～9月分の新聞から干ばつ関係の記事を切り抜き、日本に持ち帰って分析してまとめたのが地誌研年報1号の「新聞・雑誌よりみたインドの1987年大干ばつの実態」であります。地誌研年報の発刊でもあり、編集者としてできるだけ高いレベルを堅持したいと思って「研究ノート」にしましたが、いま読み返して「論文」扱いにしてもよかったなと悔やんでいます。地誌研年報

の発刊についてもいろいろ苦勞がありますが、これが最後の刊行かと思うと、創刊者として断腸の思いです。総合博物館への統合はあくまでも発展的改組と信じ、総合地誌研時代の「フィールドを大事にする」伝統を持続するべく、地誌研年報並みの刊行を切望します。

後日談になりますが、アバネリ村にはその後1995年と2002年の二度訪ねました。2002年2月の再々訪問は、広島経済大学の定年退職を前にしていたので、これを機に女房をインドに連れていき、旦那のかつての苦勞をとくと見せてやろうと思ったからです。ところが、村の変わりようには私の方が驚いてしまいました。牛が歩くだけで土埃が立ち込めていた町からの進入路は拡幅と舗装で整備され、2・3軒のピティショップ（小店）しかなかった寺院前の広場には、レンガ造りの食料品・衣類・雑貨などの店が並んでいるではないか。店主はどれも私を単なる異邦人と見ていたが、集落の中に入ると旧知の顔がつつぎに現れてきた。“あの変化はどうして？”と問うと、BJP（インド人民党、ヒンドゥー至上主義を主唱）政権になってから、政府が急に寺院の修復を始めるわ、道路を立派にするわ、知らない人間が店を出すわの大変化、でもわしら百姓の生活はさっぱりですわとの冴えない返事…。1987年の調査の時、アバネリの発展策は？と村人に問われ、私はアグラ～ジャイプール国道の中間点にある村の立地を考慮して、ヒンドゥー寺院を修復して参詣者や観光客を誘致してはと答えたことは確かだが、こんな村人不在の形で実現するとは思いませんでした。思うに、これはBJP政府のヒンドゥー至上主義政策で一方向的に実施され、村人はそれにほとんど参画できなかったことが原因らしい。村ではトラクターや灌漑井戸の数は増えたが、ローンの支払いに追われ、また地下水の汲み過ぎで水位が10数メートルも下がり、井戸の掘り下げにまた金がかかるとこぼしていました。

今にして思えば、私達がこの村を調査した1987年当時は、70年代の「貧困の追放」に向けた農村開発の諸計画が80年代初めに統合農村開発計画 IRDP にまとめられ、その成果がようやくあらわれてきた頃でした。その政策効果をまとめた農村開発省の『IRDP の進捗状況報告』（1987）をめぐって、インドの経済学者は例のごとく果てしない論争を繰り返しており、その論争のなかから、二次資料やマクロデータに基いて経済学者が行う IRDP 実施についての一般化は信用できないとか、必要なことはフィールド調査とそれによる政策策定のフィードバックであるといった、従来のインド学界には見られなかった意見も飛び出していました。われわれフィールドワーカーから見れば、そうした意見はごく当然のことで、現に広島大学はデカン高原の村で、またラージャスターンの乾燥した大地で、IRDP がめざす農村貧困の解消に遅々としているが、一定の成果をあげていること、IRDP はインド農村の伝統的な社会経済的構造（共同体）の変革に寄与しており、「停滞のインド農村」からの脱却も近いことを、実例を挙げて報告していたのです。インド経済も当時

は拡大基調を示していたが、同時にマクロ経済的不均衡も拡大しており、1990年代に入つてまもなく、経済の破綻と政治の混乱によって、堅実に発展の足取りをとっていた農村にも新たな刺激を与えることになったといえましょう。

14. 世情騒乱のなか、半島中部の村々で分散調査をする

第Ⅲ期の第2次および第3次の調査は、マディアブラデシュ州とマハーラーシュトラ州でそれぞれ二つの村を選んで行う予定であったが、1989年の第2次調査の出だしからつまずいてしまいました。中央政府の調査許可を順調に取得し、予定通りデリーに着いたものの、官庁街の至るところにバリケードが張られ、防護服の警官が警戒しているではないか。日本では報道されていなかったが、ラジーブ・ガンディーの国民会議派政権が総選挙に敗れ、それに替わった V. P. シン首相が、選挙の公約であったマンダル委員会報告（マンダル・レポート）の実施を発表したからです。マンダル・レポートとは、「後進カースト」の人びとに公務員採用枠の27.5%を留保するという勧告であり、勧告を受けた時の首相インディラ・ガンディーは問題が多すぎるとして棚上げしていた代物である。インドでは独立後まもなく、最下層の「指定カースト」や「指定部族」の人びとに対して公務員や有力企業の採用枠の22.5%を留保していたので、これにマンダル・レポートの分を加えると、留保枠が50%にもなるとして激しい議論が起こっていたのです。特に上層カーストに属する学生たちは、就職の機会がいちじるしく狭まるというので猛反発していた。私達のデリー滞在中、市中心街で女子高生がガソリンをかぶって焼身自殺するという事件が起こり、それに刺激されて反対運動が全国に広がっていったのです。危険のため、外国人に行動の自粛が求められていました。

私達は前回と同様に、早々にデリーを離れ、調査地のマディアブラデシュ州モレナ県に移ったが、事態はデリーと同じでした。県庁に知事を訪ねると警察で指揮しているという。嫌がるリキシャのじいさんにチップを弾んで、学生のいない裏通りを縫って警察に到着すると、“調査は結構だが、ご覧の通りで身の保障はできない”との冷ややかなご託宣…。県知事との面談中にも、警察の奥の部屋から拘留されている学生たちの怒号が聞こえ、外は市民たちのシュプレヒコールに満ちている。このような状況では無理してはならない。同行のシャルマ先生と研究協力大学のアンバー大学長 B.V. シン先生と相談し、今年度の調査はアンバー大学の地理学スタッフの助言や協力（付き添い）を得ながら、関係官庁・事業所での聞き取りや資料収集、標本調査村ディカトブラでの予備的調査にとどめることにしました。

厳しい現地情勢に直面した私は、隊の皆さんと相談した上で、それまでの調査計画を全面改訂して、今後の行動を翌年の第3次調査計画に併せて、次のように決定しました。①調査予定の5村を2人ないし3人で分担し、2カ年で調査する、②本年はメディアブラデシュ組（中里・岡橋・友澤）とマハーラーシュトラ組（米田・南莖）に分かれ、それぞれ担当の県・村を訪ね、基礎的な資料の収集、できれば予察的な調査を行う、③藤原はシャルマ先生とともに二つの州政府および県庁や地区開発事務所を表敬して調査の協力を依頼し、また現地の研究協力大学スタッフと調査内容の細部をつめる、④来年（1990年）はそれぞれが担当する村を集中調査する、というものです。

1989年の調査地にディカトブラ村をなぜ選んだかについては、われわれが従来から選定基準にしてきた地理的諸指標のほかに、インド国勢調査局によるこの村の「1961年村落調査報告書」が公刊されていること、前述のアンバー大学長がシャルマ先生の古くからの友人で、現地で起こるであろう難問に対処いただけると思ったからです。この地域はチャンバル下流部の右岸に位置する肥沃な土壌をもつ沖積台地ですが、はげしいラヴィン（ガリー）侵食と繰り返す干ばつによる被害に加えて、長年にわたるザミンダール制の下での搾取とダコイト（野盗）の跳梁によって、社会的にも経済的にも後進的な状態から脱却できずにいたところです。モレナの駅に着くなり、抜き身の大刀を肩に担いだ髯面男が歩いていたのにはびっくりさせられました。この地方のダコイトとは、その前身がイスラム勢力に敗れたラージプートの後裔といわれ、樹林に蔽われた（現在はほとんど裸）ラヴィン深くに潜んで、悪徳ムスリム商人や地主を襲っては金品を奪い、それを貧民に配ったという義賊であったといわれています。独立後も、そうした義賊や、それにあやかった盗賊も出没していたといわれ、私達が調べたディカトブラ村のブラーミン地主も1960年初めに難に遭ったという記録があります。私達は到着早々、その根拠地であったところに案内され、いろいろ説明を受けたはずですが、無風状態の谷底を強烈な日射にあえぎながら歩いたことしか記憶にありません。

ディカトブラでは、全員による概略調査と翌年の中里・南莖組の本格調査によって、村の変貌についていろいろ興味あることを知ることができました。その詳細は「地誌研年報2」に掲載されていますが、それをかいつまんで言うと、①ブラーミンの所有であった村の耕地は、1960年頃までの土地改革によって小作・孫小作のジャターブ（指定カースト）の所有になった、②70年代に入ると灌漑水路が通じて冬小麦の栽培が可能になった、③80年代から州政府の1県1商品作物の奨励で小麦に代えてマスタード栽培を増やした、④マスタードの絞り粕を濃厚飼料としてジャターブにも牝水牛の飼育が普及し、ミルク販売による収入の増加がみられた、⑤ジャターブへの公務員採用枠の留保、牝水牛購入のための

政府補助（IRDPの一環）などによって、村の社会経済はめまぐるしく変転したことが挙げられます。ディカトブラ（ディキットというブラーミンの小村の意）はいまやジャターブ（最下層の指定カースト）主役の村となり、ジャターブでメンバーの大半を占められる村パンチャヤットは、次の総選挙の支持を従来の国民会議派からBJPに切り替えようかと話し合うなど、国政選挙をも左右しかねない勢いになっていました。インド政界はご存知のように、1980年代後半から混乱期に入りますが、私達は農村調査の中からいち早くその趨勢を察知しておりました。

15. デカン高原中部のマラタの村で、村民の結束と弛緩を知る

1990年の調査、すなわち第Ⅲ期の第3次調査は、2次調査の遅れを挽回すべく、前期講義を終えた9月19日から12月2日まで、82日間という長きにわたりました。忙しくはあったが、第Ⅲ期プロジェクト（干ばつ常習地域プロジェクト）で予定していた計画をほぼ完全に終えることができ、実りの多い期間でした。その間、留守を預かる森川・中田先生に感謝を、指導をすっぱかさされた院生・学生諸君にはお詫びを申し上げます。

調査村の分担は前年度の取り決めに少し変更し、マハーラーシュトラ州の二つの村（バブルガオン、ダヒワディ）に米田・南埜組、マハーラーシュトラ州南部のヴィンディア山中の村ナハルケダには岡橋・友澤組と生物生産学部の河野助教授、前年度に予備調査したディカトブラには中里さんをメインに前半を藤原、後半を南から転じてきた南埜が応援、最後にマルワ高原中央部のガデルに岡橋・友澤・河野組と藤原・中里が加わるという、まことに機動的な配置でした。しかし、都市間の電話すらなかなか通じない状況でしたので、事故などでちょっと一部が狂えば、全体の計画が破綻しかねない危うい日程でもありました。ただし、デリーへの電話は通じるので、緊急連絡はデリーのシャルマ先生宅を介して行うことに、実際にこの緊急ラインを通じて用件を済ませることができました。各グループはデリーでの資料収集や買い物もそこそこに、前年に下調べをしていた担当地域に散っていきました。隊長としては、成果はともかく、事故のないことを祈るのみでした。

私自身は、最初は中里さんとともにディカトブラに入り、集落地図づくりや世帯の悉皆調査、郡役所や開発事務所での聞き取りなどを手伝った後、中里さん一人を残して米田・南埜組が待つプネ（当時は英語読みでプーナ）に飛んでいきました。中里さんとは言えば、アンバー大学地理を卒業し、中学の教師をしていたS.R. バゲル君を調査助手兼通訳にし、お酒が好きで歌の上手な、単身赴任の灌漑事務所長と意気投合して仕事を順調にすすめ、前述のように大きな研究成果をあげてくれました。彼の人柄と思います。

マハーラーシュトラ調査には高原都市ブネのプーナ大学地理学教室の協力を得ました。前年にシャルマ先生と訪ね、標本調査村を先生の教え子 A.S. ダルウィ助教授の生まれ育ったバブルガオン村にすることに決めていました。高原都市ブネは、かつて北のムガル帝国に抵抗したマラータ王国の中心地であっただけに、伝統的な文化や独自の価値観への執着が強く、その上に19世紀初めからのイギリス植民地支配による影響も色濃く残す都市でありました。例えば、植民地時代、ここでは北インドのザミンダール制とは違って、ライヤットワーリー制（個別農民直接課税制）が施行されていたが、その徴税業務を遂行するためには「知的かつ道徳的な」インド人官吏が必要になり、その養成機関や1832年に開かれた英語学校などを通じて、ヨーロッパの文化や科学が青年たちに浸透していたということです。私達は、ブネ滞在中はプーナ大学のゲストハウスにお世話になりましたが、食事の時には国内・国外の研究者が食堂に集まり、マンダル・レポートをめぐる談論風発、その熱気はまことにすさまじいものでした。感心させられたのは、インド人学者がそれぞれの所属カーストをオープンに、その上下に頓着することなく堂々と議論を吹っかけている姿。“こんな時、日本人なら自分の出自をはっきりさせずに、一般論として発言するんだが…”と彼我の国民性の違いを考えつつ、聞き惚れていたものです。

後で知ったことですが、実はダルウィさんは「指定カースト」への留保枠でプーナ大学に入学したとか。しかし、バブルガオンでは村の出世頭として信望が厚く、その縁もあってか、米田・南埜組は順調に調査をこなしていました。私も3週間ほど滞在して、調査を手伝いましたが、その頃はちょうどサトウキビの刈り取り期で、村人は大忙しの毎日でした。バブルガオンに入って数日後の朝、カラーン、カラーンという音に目を覚まし、音のする街路に飛び出すと、幌付きや荷物をたくさん積んだ10数台の牛車の列。聞けば、用水路灌漑のない地方からサトウキビ刈り取りのために家族ごとやってきた農民たちで、数ヵ月を野宿しながら働くとのこと。立派な牛の体軀からみて、村ではそれぞれ自立した農民と思われたが、用水路灌漑でサトウキビ栽培の景気で沸くバブルガオンの村人と比較し、さらに冬に男たちが出稼ぎにでてしまう、かつての日本の東北農民の姿と二重写しになって、感慨ひとしおでした。

バブルガオンが属するマルシラス郡一帯は、西ガーツ山地のモンスーン降雨を集める貯水池から水を引き、サトウキビ栽培を発展させてきたところですが、この村だけは地形的な制約があつて灌漑の恩恵から外れていた「繁栄のなかの孤島」でありました。1982年になってようやく灌漑水がくるようになり、不安定なモンスーン降雨でモロコシ・トウジンビエなどカリフ作（夏作）に依存していた村の農業は、念願のサトウキビやラッカセイなど商品作物を栽培できるようになっていました。これに至るまでに、村では飲料用の用水

施設の設置、村内の電化、幹線道路から村までの道路など、村の基本的なインフラ整備が続きますが、それらは村パンチャヤットを先頭に BDO に働きかけてきた村民の総意と団結があったからと、私の訪問を歓迎した宴席で若い村長は力説していました。灌漑水が村にきて10年も経たないが、村人は競って市場指向型の農業に切り替えており、また家畜飼育も従来の牝牛を減らし、搾乳用の牝牛や牝水牛を増やしていました。搾乳用の水牛の飼育は村の有力ジャーティであるマラータ農家だけでなく、土地のないジャーティ（低所得世帯）にも普及していました。それは、1964年の州政府の家畜導入促進計画から、70年代に強化されてきた中央政府の農村貧困層向け諸計画、さらにそれらを統合・強化した1980年代初めからの IRDP の成果として評価していいと思います。

ある日のこと、土地がなく水牛も飼えない最貧困世帯の家のまわりに鶏がたくさん遊んでいたのもので、そのわけを聞いたところ、やはり政府補助金で飼うことができた、卵はお金になるとのこと。それはそうだが、放し飼いでは飼料代も要らないからねと、米田さんと笑ったものです。後日のことですが、デリーに帰り、NPI（国家計画委員会、インド政府の国家計画立案の最高機関）のメンバーにお会いした機会に、バブルガオンの鶏の話を持ち出し、“最近では IRDP のおかげで、片田舎でも卵が容易に手に入るようになりました。”と話したら、“え！そうですか”と喜んでいました。これはお世辞ではなく、私がインド調査に入った頃、田舎では卵はなかなか手に入らなかったからです。

私は米田・南楚組が調査したもう一つの村ダヒワディにも足を伸ばしました。この村は独立前まで、土地の大半を所有し、ジャギルダール（徴税官）も兼ねていたブラーミン地主によって支配されていたが、不在地主であるために、土地改革によってその土地のほとんどは古くから住んでいた旧小作人の手にわたりました。土地改革は南インドではかなり徹底して実施されたことが窺われます。土地を得て自作農となった人びと（マラータやダンガー）は、旧地主に代わって村の指導層となるべきでしたが、期待されたほどの活躍はみられず、村のインフラ整備はほとんど進んでいませんでした。村内にはほかに、1920年代に近くの村から移ってきたマラータ家族はいるが、彼らは独特の居住集団をつくって生活し、農業経営でも積極的であるが、村全体の発展に貢献しようとする意欲も、恐らくその機会もないように見受けられた。そこで、米田さんと私は相談して「異なるジャーティ集団の接触と自己革新によって低開発性の脱却を図る村」という作業仮説を設定し、その検証をすることにしました。

幸いマハーラーシュトラ州では、州内各県のガゼッティアなど村落研究に有用な資料が比較的多く、また官公庁資料もそれぞれの担当者から親切に提供していただきました。ラージャスターン州やマディアプラデシュ州では、そうはいきませんでした。私はかつ

て、現地調査を南インドのカルナータカ州から北インドに移すとき、“北の調査は南のようにはいかないよ”と言ったことがあります。今またヴィンディア山地を越え、古来ダクシナーバタ（南の道）すなわち「デカン」の語源となった土地、また中世の終わりにマラーター王朝が栄えた土地にやってきて、その文化と人々のぬくもりに接したとき、私のかつての言説の正しさを再確認したように思いました。そのことは、やがて岡橋・友澤組が待つヴィンディア山地の村ナハルケーダやマルワ高原のガデル村を訪ね、さまざまな困難に遭遇したとき、逆の意味で、文化境界としてのヴィンディア山地の存在をいっそう強く感じさせられることとなります。

16. ヴィンディア山中、バンジャラの村は意外に開放的

ブネから岡橋・友澤組が滞在しているインドールまでの移動は、路線バスを乗り継いで道のりでした。異邦人の一人旅に興味と同情を抱いたのか、それともインド人特有の世話好き（時にはわずらわしいほどのお節介）のためか、道中は楽しく、乗り継ぎにも困ることはありませんでした。インドールに着くと、二人は市内のホテルに滞在していました。これまでの村落調査では被調査者との距離を考えて、私は一度もホテルに泊ったことがなかったので、これは予想外のことでした。しかし、悉皆調査中は現地の研究協力者達と調査地のダム湖畔の宿舎で泊り込んでいて、その後は治安が悪いために市内に移ったと聞かされ、ホテル住まいに合点がいました。

インドールはマディヤプラデシュ州南部の工業都市であり、近くには州の工業地区配置計画によるピータンプル工業成長センターも新設され、三菱自動車とホンダの合併企業2社が進出していました。日本人スタッフも駐在し、岡橋・友澤両名は現地事情などいろいろお世話になっていました。驚いたことに標本調査のナハルケーダ村が陸軍の大駐屯地の至近距離にあることでした。私の到着を待って、さっそく三人は現地協力者のヴィクラム大学 M. L. ナート助教授を伴って郡役所と軍の駐屯地に挨拶に訪ねましたが、対応はまことに素っ気ない形式的なものでした。軍司令官から“外国人の徘徊はダメ！”と言われはしないかと心配しましたが、別にそのようなことはなくほっとしたが、郡役所では本来保存しておくべき基本的な行政資料は見当たらず、担当者があれこれ理由にならない言い逃れをするばかりだったので、岡橋・友澤組の調査の多難さを予感した次第でした。

ナハルケーダ村まではインドールから南へ42キロ、そこをチャーターした地元のタクシーで通いました。大規模工業団地の出現で交通量は急増したが、道路の整備は追いつかず、土埃もうもうの状態でした。気管支が弱い私は、インドではよくタオルで鼻と口を

蔽っていましたが、あまりにも酷い土埃だったので二人にもマスクを勧めました。そんな時にハプニングが起きました。その日の朝方、私は新聞で前日に金持ちの家が強盗に襲われたという記事を読み、“われわれも気を付けないといけないね。人前で財布を出すのは控えよう”などと話し、何時ものようにタクシーでホテルを出ました。ところが出発して間もなく、ジープ数台で張り込んでいた警官に停車させられ、尋問されました。パスポートと政府の調査許可書を見せたら、警官たちが笑いながら解放してくれました。どうやら、例のタオルのマスクとサングラスで市民が三人を強盗団と勘違いし、警察に通報したらしい。改めて周囲を見回すと、土埃の中でもマスクをしているインド人は皆無でした。街はずれの検問所を出ようとする、するすると横棒が下りて通せんぼ…。今度は余裕をもって対応したが、どうやれわれわれのタクシーを不審車として、市内いっせいに非常線を張っていたらしかったです。衛生上の理由とはいえ、タオルの覆面でインド警察の皆さんをお騒がせしました。

1970年前後からの中央政府の農村開発計画のなかに「丘陵地帯開発計画」というのがあります。これはヒマラヤ山脈の山麓や半島部の山地内の後進的な村落を対象に、貧困追放の事業を推進しようとしたもので、後に IRDP に統合し強化されたものです。私達がナハルケーダ村と、次に訪ねるガデール村を選んだのは、その事業成果を評価するためでした。ナハルケーダは世帯数が40、バピブシリ村（グラム・パンチャーヤト）に属するバンジャラ（森の放浪者の意）の小さな村でした。彼らの伝統的な生業は物資の運搬だったが、19世紀後半にその役割を鉄道に奪われると、牛の森林放牧を伴う農業に専念するようになった。ニスタール権（林野の入会権）を有し、背後の林野をかなり自由に利用していたが、1962年の村落制度改正でニスタール権を失ってしまった。80年代半ば、村の上手にチョウラルダムが建設されたが、灌漑面ではその直接的な恩恵が少なく、どうも政府の開発事業はこの村に必ずしも好意的でなかったようです。その理由はバンジャラが指定カーズト・指定ドライブでないため、政府からの特典に与ることができなかったこと、また村パンチャーヤト内の少数派であるため、その声がBDOや灌漑事務所に届かなかったのではないかとっていました。

しかし村人には、かつて広域的に運送に携わってきたという伝統があり、またバンジャラ・パンチャーヤトという村域を越えたジャーティ特有の横の連携があるため、外部の情報をとらえていち早く行動する傾向があるようです。村ではかつて林産物を町に運搬するために牡牛を飼っていたが、近年では政府の畜産発展政策（いわゆる白い革命）とインドールその他の都市におけるミルク消費の増大に対応し、さらにバンジャラの特技「牛飼育」を活かして牝の水牛や牛の数を増やしています。私達がこれまで調査した村では、こ

これらのミルク生産用牝牛や水牛の導入は、州や中央政府の補助金や低利ローンを巧みに利用して行っている例が多かったが、この村では高利のヤミ金融から多額の借金をして家畜を購入したり、飼料購入に過大な投入をしたりして、借財にあえいでいる家が少なくないようです。ミルク生産を村落経済の基盤に据えるためには、飼育技術や経営面での適切な指導が不可欠と思われました。

私は村に着くなり集落地図をつくりましたが、集落内に道はなく、敷地境界もなく、言うなれば森林内のキャンプ場のような家屋配置でした。そんなところに1戸平均6.9頭の牛と水牛が飼われているので、集落内はどろどろの牛糞で溢れていました。そんな牛糞の海で地図づくりを手伝っていた友澤さんがみごとに転んでしまいました。しかし、そんな失敗はかえって村人との距離をぐっと縮めてくれたようでした。私は1978年の南インドの調査以来、全世帯の悉皆調査や根掘り穴掘りのしつこい聞き取り調査のお礼にと、村人に何がしかの物品を渡してきました。世帯数300以上の村には小学校に地球儀や掛け地図を、村パンチャヤットには集会所の電灯や水飲み場を、また書類整理が不十分な場合はスチールの保管書棚を贈呈させてもらいました。世帯数の少ない村では全世帯に何がしかの物品を、特に奥さん達に喜ばれそうな品物を選んで、洩れなく配りました。それは、日本ではインドの女性は地位が低い、虐待されているなどと、あらぬ誤解をされていますが、“とんでもない。妻は強かった”だったからです。喜ばれるコツは近くの店で手に入るものではなく、できるだけ大きな都市でしか求められないものが効果的でした。配るのは調査の初めか、終わりでか思案したが、インド側のアドバイスに従って、調査前段の終わり、つまり全世帯の悉皆調査が終了した段階で手分けして配りました。その際も、ちゃっかり悉皆調査に世帯洩れがないかをチェックしながら…。ちなみに、ナハルケーダでは世帯数が少なかったので、(持っている家が少ないのを偵察して)ステンレスの中皿2枚を奮発しました。その効果はてきめんで、後半の調査はとても順調だったと聞きました。

17. マルワ高原のガデーラ村で、トライブの貧困脱却を考える

2週間ほどのナハルケーダ調査を終え、私はふたたび単身、夜行バスでインドールから北北東約250キロのグナの町に向かいました。連日の調査で疲れていたのか、大きくバウンドするバスに心地よく身をゆだね、眠ってしまいました。どれほどの時間が経っていたのでしょうか、周囲のざわめきで目が覚めました。人々は順番に降りていくではないか。バスの故障かと聞くと、前方の橋が工事中でこのバスはここまで、川向こうに別のバスが待っているのでもうここまで歩けとのこと。人々は手荷物の運搬を地元のポーターに任せてい

るようだ。私は思案しました。スーツケースの運搬を彼らに任せていいのか、どうかと…。周囲は真っ暗の暗やみ、任せるのはどうも不安だ。よし！自分で担いでいこうと決め、膨らんだリュックを背負い、調査資料をぎっしり詰め込んで30数キロになったスーツケースをさげて、暗やみの川原を30分あまり歩きました。インド人乗客からみて滑稽とすら思われる私のあの時の行動は、インド人を信頼しないということではなく、調査資料を決して失ってはならないという気持ちで、そうさせたのです。私たちの年代は、そういうことを「死んでもラッパを放さない」と言います。なお、私達は帰国の際、収集したオリジナルの調査資料は別送荷物にすることなく、必ず自分で携行することにしていました。不幸にして事故があっても、貴重なデータと「死なばもろとも」です。

この年（1990年）の最後の標本調査村ガデルは、ウツタルプラデシュ州西部の県都グナからアグラムンバイ道路（国道3号）を南南西に10キロほど走ったところにある小さな村でした。調査時の世帯数は97で、そのほとんどはサヘリア（森の民の意）という「指定トライブ」でした。サヘリヤはその名のごとく、マルワ高原の所々に残る丘陵性山地の森林に住むトライブで、その総数は約20万人（1971年）で、インド国内では比較的有力なトライブです。独立後、政府は土地保全の観点から、彼らの住み家である森林を政府保留林に指定し、そこに住むサヘリヤ住民に幾ばくかの耕地を配分し、農業への定着を図りました。政府関係の報告書、それに依存するインド人研究者の論文には、それを成功例として評価する意見が多いが、実情はむしろ逆ではないかという指摘も少なくありません。その実態を現地で確かめようというのが私たちの目的でした。

村に入ったとたん、住まいや人びとの身なりから、この村の貧しさを察知することは容易でした。耕地の3分の2は耕されずに放棄されたまま…。土壌は重粘土質で、痩せこけた小さな牛では犁を引くのは大変なようだ。乾いたら堅くなって鋤の刃も入らないだろう。人気のなかった集落も昼近くになると、薪採取の男たちや女の人びとが、首がへし折れんばかりの薪を頭に載せて帰ってくる。私は試みに担ぎ上げようとしたが、だめでした。60キロは超えていたでしょう。

この村になぜ農業が定着せず、人々は日銭稼ぎに追われているのか？ 調査の結果、その理由をまとめると、ガデルでもサヘリアの社会経済的な地位を向上させるために、政府はさまざまな施策を行ってきました。土地の配分によって村の農業生産は1960年代に増加していたが、70年代後半から後退の傾向をみせたのです。それは道路工事、森林作業などで日銭を稼ぐ機会が多くなり、村人は農作業に集中しなくなったからである。しかし、そうした一時的な農外収入源が少なくなると、彼等はグナ市内での不規則の日雇いや、森からの薪を売り歩くようになって、農業には戻らなかったのです。粘土質の痩せた土

地、頻繁に襲う干ばつ被害を克服するだけの知識と資力が彼らになかったし、それに引き替え、当座の生計を維持するだけの収入源が身近にあったためです。つまり、村とグナ市街地との近接性は村人をたえず商品経済の波に巻き込み、彼らの自立的な農民化を妨げてきたと言えます。しかし、薪依存の経済すらも現在、森林資源の枯渇と採取制限、石油・ガスなど家庭燃料の普及などによってきわめて不安定であります。

私達は、いま目前にしている貧しさを“どうにかできないか”とあって、毎晩のミーティングで議論したものです。IRDP 実施の最前線であるグナの BDO (地区開発事務所) になんども足を運び、また私自身、州都ボパールの州政府トライブ福祉局や州立トライブ研究所を訪れて、トライブ問題や開発事業に関する資料収集や聞き取りをやりました。それらから判ったことは、州政府が当初に行ったトライブ事業は子弟への奨学金給付、寄宿制学校の設立、農家への種子・化学肥料などの給付が主であったが、80年代からは IRDP を基礎にトライブ福祉局の独自予算で、学童への衣服・教科書の給付、手押しポンプ・集落道路などの生活基盤の整備、山羊・牛車の給付など農業振興など、多岐にわたるものでした。ガデルには寄宿制学校はあったが、民家の一部を借りての仮住まいに過ぎませんでした。山羊飼育の奨励は森の民には適切であるが、自家消費が精一杯で、ナハルケータ村のように販売するだけの余裕はありませんでした。ガデルの村人は日々の生活に追われているためか、あるいはカースト・パンチャーヤトのような村の枠を越えた連携がサヘリアに欠如しているためか、村全体の面倒をみようという強力なリーダーとか、村外からの情報・刺激に敏感に反応して自己改革するという気風が欠落しているのではなかろうか。調査を終えて BDO に別れの挨拶にうかがった時、所長から“村の発展策について何か意見を…”と乞われたので、“政府自体も、単に上から金銭や物品を与えるのではなく、サヘリア村民の内発的な改革意欲や先導的な活動を引き出すような事業を行う必要があるのでは…”と、カルナータカ州やマハーラーシュトラ州での実例を出しながら答えました。うなずいて聞いてはいたが、納得してくれたでしょうか。

ガデル村ではちょっと緊張したことがありました。ガデルでも、例のように地元大学の学生・院生さんたちに調査助手兼通訳として手伝ってもらっていましたが、ここでは地理学や社会学の専攻学生はおらず、聞き取り調査は初めてという諸君ばかりでした。なかには“バイト料がいいぞ”というだけで参加した者もいたようです。したがって、面接調査の際の注意事項、例えば面接票の穴を早く埋めようと、性急に質問してはならない、私見を言って相手の意見を誘導してはいけない、などを事前に指導しておきました。しかし、日々の仕事に追われている村人には、長時間の面接調査に付き合うのはわずらわしかったに違いありません。全世帯の悉皆調査を終え、後段の個別事項の聞き取りに移った

ころ、“仕事にじゃまだ。明日きたらこれだ！”と薪伐採用の鉈を振り上げられた、明日からやりたくないと学生が訴えているとの報告を受けました。調査拒否にあったのは、私の調査では初めてでした。

これまでは、調査に先立ってその村のサルパンチを通じて、村人に調査の趣旨を伝え、協力を仰いでいましたが、今回はサルパンチに会おうにも所在がつかめず、BDOの役人に同道してもらって一部の村人に協力をお願いしただけでした。また、どの村でも調査の半ばに、村人に調査協力への謝礼として些少の品物を配っていましたが、ガデルでは私が村を一時離れたために、それが遅れていました。私達には調査を急ぐ余り、村人の気持ちを押し量る余裕に欠けていたのかもしれませんが。私は中里さん、岡橋さんと相談し、ナハルケーダ村の例にならって、ステンレスの食事用プレート（村人にとっては高級品）をグナの街を走り回って買い集め、全世帯に配って回りました。通訳の学生達には“リーダーが帰ってきた。協力への感謝です”をはっきり言うように命令して…。その後の聞き取りはすべて順調に行きました。対応は、躊躇することなくすばやく、そしてインド式にどぎつとも明確に…がよかったのかと思いました。貴重な経験でした。

18. 調査の終わりに

「干ばつ常習地域の開発」を研究課題とした第Ⅲ期の3回の現地調査では、さまざまな困難を経験し、計画を放棄せざるを得ないようなこともありました。しかし、それらを一つひとつ克服するたびに、私たち広島大学のインド調査は確実に成長していきました。インド半島縦断の分散調査の2カ年、私は南北1,000kmに散らばる五つの村を、路線バスを乗り継いで各班の調査状況、問題点のチェックなどを調整して回りました。バックパックを背負っての気儘な旅ならいざ知らず、調査資料を詰め込んだ重いスーツケースを担いでのインドの一人旅はやはりきついものでした。バスの乗り継ぎでトイレに行こうにもスーツケースが心配…。しかも、89年は下院総選挙を前にしてBJPがヒンドゥー寺院再建のために「アヨーディアに集まれ！」と大号令をかけた年、また翌年はマンダラ・リポートに抗議して女子学生が焼身自殺し、それを契機にV.P.シン政府への激しい抗議行動が全国的に拡大していました。私が乗っていたバスが、途中の町で暴動が起こったために、3時間ほど足止めを喰らったことがあります。夕刻、ようやく町に着いたが乗り継ぎはなく、窓ガラスを完全に壊されたバスの脇で、途方にくれたことを思い出します。自分で言うのも変ですが、あの混乱の中を一人で、あのインド大陸をよく走り回ることができたものだと感心しています。

いまから考えると、私達が第Ⅱ期および第Ⅲ期の調査を行った1980年代は、国民会議派主導のインドの政治体制が崩れ、インドの社会経済システムが急速に変貌していく転換期ではなかったでしょうか。もしそうとすれば、そのような時代に農村でフィールドワークができたことは、研究者として幸運ではなかったでしょうか。村人が口角泡をとばして議論したり、村バンチャーヤトの議長が指定カーストから選出されるのを見て、国民会議派の凋落ぶりやコミュニカルな対立の激化を肌で感じ取ることができたからです。インドでは、どんな遠隔の村でも、またどんな社会階層にも政治経済の変革は浸透しており、やがて大きなうねりとなっていくであろうことを予感できた時期だったのです。そのことをアジア経済研究所の友人に話すと、私達も入りたいが調査許可が難しくてね、とぼやいていました。そのような時期に、外国の調査チームでは唯一というほど、広島大学がインド調査を継続できたのは、あの第Ⅲ期計画初年度の調査許可取得でみせた「インドへの道」への執念であり、「粘り勝ち」ではなかったのではないのでしょうか。われわれのインド地域研究への「ひたむきな情熱」は、その後、村上隊の「人的資源開発プロジェクト」に引き継がれ、さらに現在は、岡橋隊の「工業化、都市化プロジェクト」へと展開しており、喜ばしい限りです。

最後に、藤原・村上・中山・米田の4人が共同執筆した「海外地域研究の理念と技法」に、「刊行によせて」を寄稿して下さった石田先生の文章を掲げます。われわれ広島大学インド調査チームの「共同研究」がどんなにすばらしいことか、ご理解いただけると思えます。

「グループで行う調査研究の際に、各個人の専門とグループとしての統一性とのかわりは、いずれの調査でも一番難しい点であろう。各人が勝手にやれば予定調和の原理に導かれた、バランスがとれ統一性のある村落研究ができあがるというような、そんな生やさしいものではない。大局・全体をにらんで、無理な調査をメンバーに求めねばならぬことも多いのである。予め調査票を作成し、現地の大学で調整してから村に入っていくのであるが、さらに変更を迫られることがしばしば起こる。予期しなかったテーマがでてくることも多い。隊全体としての成果に重点を置きすぎると、各個人の専門を犠牲にすることがある。われわれは共同調査をしながら、隊員お互いに教えあい、かつ習っていったといえます。」

[付記]

本稿は、関西大学野間晴雄教授を代表者とする科学研究費による研究「地理学を核としたアジア地域研究のデータベースと研究者ネットワークの構築」の求めに応じて、2003年1月に広島大

学のインド調査関係者が自らの担当部分を回顧したうちの筆者関係分を下敷きに、内容の大幅追加と対談形式から一般的な文体への変更を行ったものである。筆者の話題提供は石田 寛先生の後であったため、同先生の名が多く出てくることになった。お礼を申し上げます。